

第46回「全日本中学生水の作文コンクール」
入賞作文集

水について考える

主催 水循環政策本部・国土交通省・都道府県
後援 文部科学省・農林水産省・経済産業省・環境省・
全日本中学校長会・水の週間実行委員会・独立行政法人水資源機構



「健全な水循環」

ロゴマーク

第46回 全日本中学生水の作文コンクール について

水は人間や動植物といったあらゆる生命の源であり、社会経済活動に欠かすことのできない最も基礎的な資源であり、限りある資源でもあります。

「水の日」及び「水の週間」は、水の大切さや水資源開発の重要性に対する国民の関心を高め、理解を深めるため、昭和52年の閣議了解により政府が定めたものです。年間を通じて水の使用量が多く、水についての関心が高まる時期である8月の初日を「水の日」（8月1日）とし、この日を初日とする一週間（8月1日～7日）を「水の週間」として、水に関する様々な啓発行事を毎年実施しております。

この「全日本中学生水の作文コンクール」は、昭和54年より「水の日」・「水の週間」行事の一環として、次代を担う中学生の皆さんに、日常生活での体験あるいはご家族や先生方から学び聞いた話などをもとに、「水について考える」というテーマで実施しているものです。

平成26年3月に水循環基本法が成立し、8月1日は法律で定められた「水の日」となりました。このことから、「全日本中学生水の作文コンクール」を政府全体の取組とするため、最優秀賞に内閣総理大臣賞を、優秀賞に関係省大臣賞を創設したところです。

今回は、全国の中学生から7,516編（学校数228校）の応募があり、自らの体験を通じ日常生活における水の貴重さを表現したもの、美しく豊かな水を未来へ受け継いでいくために水を大切にしていこうという気持ちが表現されたもの、過去に各地で発生している地震や豪雨災害等の経験を通じて水について考察したもの等がありました。

このたび、入賞作文40編を作文集にまとめましたので、多くの方にお読みいただき、学校やご家庭において、「水」について考えるきっかけとしてご活用いただければ幸いです。

最後に、作文コンクールの実施にあたり、応募された中学生の皆さんや担当の諸先生方、またご多忙のところ審査をいただきました審査委員の先生方に厚くお礼申し上げますとともに、ご協力いただきました文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、都道府県、全日本中学校長会、水の週間実行委員会及び独立行政法人水資源機構等関係の方々には深く感謝申し上げます。

令和6年9月

国土交通省 水管理・国土保全局 水資源部

「水の日」・「水の週間」について

「水の日」及び「水の週間」については、昭和52年5月の閣議了解を基にその行事等を実施して参りました。諸行事の実施により我が国の水問題の解決を図り、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することを目的に、年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まっている8月の初日である8月1日を「水の日」、この日を初日とする一週間を「水の週間」としております。

「水の日」及び「水の週間」について

閣議了解
昭和52年5月31日

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め、理解を深めるため、「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年8月1日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

平成26年3月に水循環基本法が成立しました。本法律では、水が健全に循環し、そのもたらす恵沢を将来にわたり享受できるよう、水循環に関わる施策を包括的に進めていくことが不可欠であるとされました。また、同法第10条において、「水の日」が8月1日と規定され、国及び地方公共団体は水の日趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならないとされています。

水循環基本法（平成二十六年法律第十六号）

（水の日）

第十条 国民の間に広く健全な水循環の重要性についての理解と関心を深めるようにするため、水の日を設ける。

2 水の日は、八月一日とする。

3 国及び地方公共団体は、水の日趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならない。

全日本中学生水の作文コンクールは、広く国民が水の重要性についての理解と関心を深めるための普及行事として、「水の日」・「水の週間」行事に位置付け実施しているものです。

目次

最優秀賞 (一編)

《内閣総理大臣賞》 田んぼの水に思いをはせる

東京都 新宿区立西早稲田中学校 二年 秋永 橘香 1

優秀賞 (九編)

《農林水産大臣賞》 水を想い、水を守る

徳島県 鳴門教育大学附属中学校 二年 川原 もも香 2

《経済産業大臣賞》 水と共に暮らす

北海道 砂川市立砂川中学校 二年 羽川 莉子 3

《国土交通大臣賞》 災害時協力井戸の活用

三重県 高田中学校 一年 渡辺 心晴 4

《環境大臣賞》 あまい水

静岡県 不二聖心女子学院中学校 二年 小池 翔子 5

《全日本中学校長会会長賞》 「輝け 日本の天然水」

宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 三年 崎田 莉央 6

《水の週間実行委員会会長賞》 水道大国ニッポン

ベトナム ホーチミン日本人学校 三年 中田 風咲 7

《独立行政法人水資源機構理事長賞》 おぼあちゃんとの旅

香川県 高松市立国分寺中学校 三年 山下 花音 8

《シヤワーズ賞》 未来へ繋ぐ水源

徳島県 鳴門教育大学附属中学校 二年 柳本 紗那 9

《中央審査会特別賞》 「地域をつなぐ水」

宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 一年 林 はる 10

入選 (三十編)

北海道 下川町立下川中学校 一年 三浦 かりん 11

福島県 葛尾村立葛尾中学校 三年 松本 晴樹 12

福島県 須賀川市立第三中学校 三年 角田 紗羅 13

神奈川県 川崎市立西生田中学校 三年 加藤 孝祐 14

新潟県 十日町市立中条中学校 二年 玉田 佳暖 15

新潟県 新発田市立佐々木中学校 二年 前田 七海 16

新潟県 新発田市立佐々木中学校 二年 江端 愛莉 17

石川県 石川県立金沢錦丘中学校 三年 西 凌成 18

静岡県 不二聖心女子学院中学校 一年 名倉 和紗 19

静岡県 浜松市立笠井中学校 二年 二村 陽日 20

静岡県 常葉大学附属常葉中学校 二年 西ヶ谷 あかり 21

京都府 京都先端科学大学附属中学校 二年 徳田 葵 22

京都府 京都先端科学大学附属中学校 三年 江部 花音 23

大阪府 大阪府立水都国際中学校 一年 岡野 朱里 24

大阪府 大阪府立水都国際中学校 二年 須摩淵 心 25

大阪府 大阪府立水都国際中学校 一年 内海 はなえ 26

資料

第四十六回「全日本中学生水の作文コンクール」募集ポスター 41

第四十六回「全日本中学生水の作文コンクール」概要 42

第四十六回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査等優秀者名簿 43

第四十六回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況 44

第四十六回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移 45

第四十六回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式 46

兵庫県 兵庫教育大学附属中学校 三年 片岡 映萌 27
 和歌山県 田辺市立大塔中学校 二年 田中 伸乃丞 28
 鳥取県 鳥取市立桜ヶ丘中学校 二年 高橋 彩夏 29
 香川県 さぬき市立さぬき南中学校 二年 西尾 葉奈 30
 福岡県 福岡市立福岡東中学校 三年 渡口 紗衣 31
 長崎県 長崎大学教育学部附属中学校 三年 小嶺 桃佳 32
 熊本県 八代市立第八中学校 一年 稲田 侑子 33
 熊本県 八代市立第八中学校 一年 田代 優羽 34
 大分県 大分市立竹中中学校 一年 後藤 優奈 35
 宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 二年 外山 杏実 36
 宮崎県 宮崎県立城東中学校 二年 下地 杏梨 37
 沖縄県 宮古島市立城東中学校 二年 小山 蒼介 38
 沖縄県 伊是名村立伊是名中学校 三年 諸見 利音 39
 オランダ アムステルダム日本人学校 三年 塚本 伊織 40

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

田んぼの水に思いをはせる

東京都 新宿区立西早稲田中学校 二年 秋永 橘香

「水」といって私が一番最初に思いつくのは田んぼの水だ。まだ、幼稚園生だった頃、東京から田んぼや畑が多い地域に引っ越した。ここでは、父に連れられて何度も田植えに行った。田植えの仕方は農家のおじさん達が教えてくれた。水路や堰を管理する土地改良区という組織のおじさんだ。

田植えが終わると、生き物採集が待っていた。毎週毎週、長靴と着替えを持って出かけて行った。おじさん達、地域の小学生と夢中になって、たも網で田んぼや水路をすくった。一緒に水路をすくった小学生とは不思議とすぐに仲良くなれた。捕った生き物を大きな桶に集めた。メダカ、ドジョウ、タモロコ、ギンブナ、スジエビ、水棲昆虫、桶に入りきらない大きなコイ、ナマズが捕れることもあった。私は、すっかり田んぼの生き物が好きになり、自分用のたも網、水槽を揃え、家族で生き物を探しに行くようになった。

稲刈りも終わり、冬が訪れた。少し寂しいと思いつながら田んぼを見に行った。田んぼに水はなく、稲の切り株が寂しそうに残っていた。小鳥のさえずりがかすかに聞こえたが、生き物の気配は消え、静まり返っていた。

ドジョウが隠れているかもしれないと思い、水路の小さな水たまりを、たも網ですくってみた。ワア、思わず声をあげてしまった。網の中に、わずか二、三匹の小さな鮒が三匹、ピチピチと跳ねていたからだ。小さな水たまりに身を寄せ、春を待っていたのだ。こんなに小さくても、一生懸命に生きている。そう思い、慌てて私は小鮒を水路に返した。小さな水たまりが小鮒の命をつないでいたのだ。私もまだ小さかったが、水が命を支えていることを強く感じた。

小学校二年生の時、再び東京に住むことになった。田んぼや水路からは遠く離れたが、そこでの楽しい記憶は鮮明に残っている。

田んぼの水に思いをはせ、人と水について考えてみた。一枚一枚の田んぼを潤す水は、日本人の命を育むお米を育てている。張り巡らされた水路は血管、田んぼをめぐる水は、まるで血液の様だ。人間の体では血液に肺が酸素を供給、肝臓が有害物質を分解、腎臓が老廃物を除去している。この他、心臓、胃や腸、多くの内臓が各々の役割を果たし、命を支えており、どれかが停滞すれば、病気になってしまう。

水も血液と同じだ。汚れたり、不足すれば、人間は生きていけない。田んぼの水も、雨水を蓄える森林、川、ダム、堰、水路、田んぼ、これらが、多くの人々の絶え間ない努力によって守られ、しつかり役割を果たしているからこそ守られているのだ。

田んぼや水路について、知りたくなり、インターネットで調べてみた。血管のように張り巡らされた水路の長さは、四十万km、地球十周分に相当する。優しくしてくれた土地改良区や農家のおじさん達が昔から大切に守り続けてきたものだど知り、とても驚いた。

更に調べると、田んぼや水路は、お米を作る以外にも、とても貴重な役割を果たしていることが分かった。雨水を貯めて洪水を防ぐ、土砂崩れを防ぐ、川の流れを安定させる、地下水になる、水を浄化する、気温の上昇を緩和する、生物多様性を保全する、癒しや安らぎをもたらす。この多面的な機能が東京に住む私たちを含むすべての人々の生活を支えている。

田んぼの水はお米の中に蓄えられ、それを食べた人に吸収され、体で作られる。私達が安心して健康に過ごすためには、田んぼや水を守り続けなければならないと強く思った。

水のために私ができることには限界があるが、水を無駄にしない、油や汚い水を流さない、お米や野菜をおいしく食べる。最後に、田んぼや水を守る人達への感謝の心を大人になるまで持ち続けることを決意した。

農林水産大臣賞（優秀賞）

水を想い、水を守る

徳島県 鳴門教育大学附属中学校 二年 川原 もも香

私の家では、毎年、ゴールデンウィーク中に田植えをする。家族全員が大型連休となるこの大切な機会を活用して、「田植え」という共同作業を手早く、かつ愛情を込めて行う。この一大イベントは、肥料をまいて耕運機で土を耕し、あぜをきれいに整え、満を持しての作業となる。

例年通り、五月四日が田植え日と計画し、あらかじめ近所にも周知した。苗箱を運ぶ一輪車や田植え機が道路を走行することで周辺一帯が交通渋滞とならぬよう配慮するためだ。

そして、何よりも大切な「水」がきっちり自分たちの田んぼに利水され、水の量を調節できるよう綿密な計画を立てる。

今年もまた、田植えを行う前日に、田んぼへ水を引いてくる麻名用水に沿った道を歩いた。家族でウォーキングをしながら、近所の田植えの環境が整備されているか、用水に住む生き物のようすも観察しながら確認した。

今となつては見慣れた麻名用水だが、数年前まで、その流れを川だと思いついて疑わなかった。いつのことだったか、この川の名前は何なのかと母に訊ねると、それは麻名用水という飲料や防火、灌漑のために水を引いたりためたりする施設だと教えてくれた。私の住む地域は稲作に携わっている兼業農家の方が多く、我が家もその中の一軒である。そのため、この用水路には大変お世話になっているということも母は話していた。

一級河川である吉野川はとても澄んだ清流であり、それは地域人ならではの誇りだ。そして、吉野川と同じように、麻名用水から我が家の田へと引かれる水が辿る水路、そしてその水自体が、生活になくてはならない、私の大好きな「水」のひとつである。

また、水についての学習も、毎年の長期休みなどを利用して施設見学を続けている。例として、旧吉野川河口堰などのフィールドワークを通して、吉野川水系は家庭用水だけの役割を果たしているのではなく、工

業や農業用水としても重責を担う活用がされていると学べたことが挙げられる。河口堰の存在が計画的にわたしたちの暮らしに大きな役割を果たし、水の流れを調節してくれているからこそ、自分たちも「水」を当たり前前に利用できていることを実感する。

自らが田植えの手伝いをするという体験を通して、祖父母、また、曾祖父の先代人から「水とひととの関わり」を知る。潤沢な水は、非常に長い歴史の中で、たくさんの人の関わりを経て当たり前のように存在する。

蛇口をひねると出てくる水。外の景色に目をやってもあふれている水。それは、過去の人々が残した最大の財産であると私は考える。

だが、年明けの石川県で発生した能登半島地震で被害を受け、断水により不便な生活を余儀なくされた方々を目の当たりにすると、自分たちでつくる食料も、社会全体を取り巻く良質で安全な水があつてこそのものであると痛感している。

さて、いつもこの田植えシーズンには、水に対しての敬意が深まる。「おいしいお米を食べられて、健康に生きられているのは水のおかげだ」と。だが、本当は、いついかなるときもそうやって感じていなければいけないことも分かっている。世界中に水を求めてつらい思いをしている方がいて、その方たちのためにもわたしたちが小さなことから行動を起こしていかなければならない。

「水」は、食料となり、人の命綱へと姿を変える。「水」は、商品となり、お金へと姿を変える。「水」は大雨となり災害を引き起こす。「水」は、かたちを変化させ、わたしたちの生活を支えたり、まれに、脅かしたりする。そんな「水」と共存し、ここ徳島から、自らの住む地域の「水」を地域一体となつて守り、世界にも目を向けられる広い視野とあたたかい心を抱いた「徳島人」でありたい。

経済産業大臣賞（優秀賞）

水と共に暮らす

北海道

砂川市立砂川中学校

二年

羽川

莉子

私が暮らす砂川市。「砂川」の名前の由来は、アイヌ語の「オタ・ウシ・ナイ」からだという。「オタ」が「砂」、「ウシ」が「多い」、「ナイ」が「川」。そこから「砂川」と名付けられた。名前の通り、砂川は川と深い繋がりがあ

る。砂川は、石狩川とその支流である空知川が合流する位置にある。明治時代からこの河川を利用してきた。木材の流送や砂利の採取。水田が開かれ、様々な工業も盛んになっていった。やがて人口が増えて砂川市となり、私は今、この町で暮らしている。

私が登校する通学路に橋があり、その下に川が流れている。目を向けると、レジ袋のゴミやペットボトルなどが、無造作に捨てられていた。最初は、嫌だなあと思った程度だった。でも、ゴミの海洋汚染やマイクロプラスチック問題を知ってからは、真剣に受け止めるようになった。人がポイ捨てるゴミが、水を汚す大きな問題を生み出しているのだ。

水を汚すのは、私たちの水への関心が薄いせいではないだろうか。人間にとって、なくてはならない水。水は、限りある貴重なものである。この日本でも、水不足や水質汚染は現実のものとなっている。そうした環境の中でも、水道から透明なおいしい水が出てくるのは、その仕事に携わっている人たちの努力の賜だ。下水道や河川を管理するのも、全て人の手によるものである。その人たちに水のことを全て任せただけでは、大切な水は守りきれない。水を使う私たち一人ひとりが、水を守るために行動を起こすべきなのだ。

川と共に暮らしを築いてきた砂川。先人たちの時代から計り知れない苦労と努力を重ね、水の恩恵を受けてきた。水道事業を始め、それは現在も続いている。

石狩川は大きな河川であるため、大雨により川が氾濫し、大きな被害を受けてきた。その被害を防ぐために、八年をかけて砂川に大規模な遊

水地を完成させた。遊水地には、大雨が降ったときに石狩川の水を一時的に貯留することで、洪水被害を防ぐ役割がある。そのおかげで、私たちは安心して暮らしているのだ。

砂川の火力発電所では、石狩川の水を利用している。水を加熱して蒸気にし、タービンを回転させて、私たちの暮らしに必要な電力を生み出している。使用済みの温排水は、冬場は流雪溝で歩道の雪を解かすために再利用されている。また、新しくできた化粧品工場も、工場排水を浄化して、トイレの水として再利用している。しかもその水を再び浄化したあと、池に貯めて水に含まれる余分な養分を微生物や植物に吸収させて、よりきれいな水にしてから石狩川へと流しているのだ。

地域の水を守ってきた苦労の歴史、今も続く水を守るための取組。砂川で暮らす私たち一人ひとりが、しっかりとその思いに込めたいと思う。私たちこそが、水の恩恵を直接受けているのだから、水を守るための取組を行っていくことが大切なのだ。

私も、水の出しっぱなしや油や洗剤の排水に気を遣うようになった。ゴミのポイ捨ても絶対にしない。私たちの手で、こうした小さな取組から始めていくことが、水を守ることに繋がっていくのだと思う。中学校でも、地域の清掃活動を行っている。私も参加したとき、水への影響を考へながら、少しでも環境がよくなればと思つて、ゴミを拾った。

先日、通学路の川面に鴨がいた。自然豊かな光景に微笑ましく感じた。砂川の遊水地にも、毎年、たくさんの渡り鳥がやってくる。豊かな水が育む豊かな暮らしや自然。水と共に私たちは暮らしている。これからも、水の恩恵に感謝し、水を大切に守りながら、この砂川で暮らしていきたい。

国土交通大臣賞（優秀賞）

災害時協力井戸の活用

三重県 高田中学校 一年 渡辺 心晴

ある夏の暑い日、近所を散歩していると、公園の一角に「この水は飲めません」と注意書きのある井戸を発見した。重いポンプを何度も上下させて、やっと勢いよくはきだされた水を、私は飲みたい気持ちをもぐもぐと堪えて、手を洗った。するとその水は夏の暑さを忘れてしまうくらい冷たく透き通った気持ちのよい水だった。「この水はどこからきているのだろうか」ふと疑問に思った。そこで私は井戸について調べてみた。

井戸は人工的に掘ったもので、地下水をくみ上げる目的で使うものだ。井戸は大昔から人々の生活の助けとなってきた。しかし、昔はたくさんあった井戸も近年使われなくなっているものが多いのだそうだ。そして、私が触れた水はいわゆる地下水で、大地に降り注いだ雨や雪が数年、時には数十万年の時間をかけてろ過され、大地に浸透した貴重な資源だったのだ。あの日井戸水に感動した私の「井戸水はどこからくるのか」という疑問は大自然とながっていたのだ。その時、私は「自然ってすごい」と心揺さぶられた。

一月に能登半島地震が起こった。水道管が破壊され、被災者はとても不便な生活を強いられた。飲料水については、ペットボトルなどの備蓄や応急用水などで確保されたが、大量に必要とされる生活用水は十分な供給までに相当な日数がかかった。私たちは生活用水を平均一人当たり一日200〜300リットル使用していて、これはペットボトル500ミリリットルに換算すると約400〜600本分に相当するのだそうだ。私はもし被災したら、たった一日でどこからそれだけの水を得るのだろうかとう絶句した。

私は今回起きた災害をニュースで目の当たりにし、この先起こると言われている南海トラフ巨大地震に備え、「生活用水の確保」が必要だという意識が強くなった。そこで井戸のことを思い出した。井戸は発災後の生活に役立つのではないかと考えた。さらに興味を持った私は近所に他の井戸があるのか知りたくなり、探索を始めた。そして隣町に「災害時協力井戸」と掲示してある井戸を発見した。後にこの井戸について調べてみると、井戸の所有者の

善意で「災害によって断水が起こったときに誰でも使用してよい」と市役所に登録されている井戸であると知った。さらに、市役所のホームページを見てみると、災害時協力井戸がある場所が表示されているマップも見ることができた。これがあれば、断水が起きた時、みんなが必要な水を確保できるのではないかと思った反面、どれだけの人が災害時協力井戸を知っているのかということを見ると、もっと多くの地域住民がこのことを知るべきなのではないかと思った。せっかくなにか困ったときに使える井戸があるのに、知らない人がいるのはあまりにももったいない。そこで私は、より多くの人に災害時協力井戸の位置や活用法を認知・把握してもらうため、ポスターを制作しマシオンや公民館の掲示板に貼りだしてみようかと思った。ポスターを貼ることで災害時協力井戸の存在を知り、いざという時に備えることができる人も増えるだろう。またポスターだけでなく地域の人にも声をかけることで、日頃からコミュニケーションをとり、災害が起きたときに共助が実現するのではないかと考えた。

私たちは、自然がもたらす災害を避けることはできない。しかし、その自然の恵みを有効に使うことで、発災後の不便な生活にもゆとりが持てるようになるのではないか。だから私はたとえ小さいことだとしても、少しでも多くの人に「災害時協力井戸」の存在を伝えたい。

環境大臣賞（優秀賞）

あまい水

静岡県 不二聖心女子学院中学校 二年 小池 翔子

私の思い浮かべる水辺には、いつもホタルが飛んでいる。我が家の庭に湧水が流れており、毎年初夏になるとゲンジボタルがチロチロ飛ぶ。それを眺めるのが私の夏の風物詩である。

だから私にとってホタルは、身近な生き物だった。幼い頃はどの川にもホタルがいるものと思っていたから、「ホタルはきれいな水にしか住めないんだよ。汚い水にはまじりまじり言っかけて寄りつかない。だからうちの水はきれいなんだね。」と、祖母に言われたときは驚いたものだ。そして同時に、誇らしくも思った。それまで当たり前に見てきたホタルと水が宝物のように思えてきた。

この宝物を守らねばという使命感を心に宿した幼い私は、その年のカワニナ撒きをする祖母と兄についていった。カワニナはホタルの幼虫の餌となる水巻貝で、ホタルが元気に育つように、庭の小川に少しずつ足していくのだ。まず祖母が、プラスチックの容器からカワニナを出し、小川の上からばらばらと撒く。次に兄がぼとぼと水に落とす。順番を待つ私は、この神聖な儀式に、肺が縮むほど緊張していた。ついにカワニナを渡された私は、焦って容器ごと小川の中へ放り投げてしまった。ぼちゃん、と大きな音が鳴り、祖母は笑い、兄は呆れながら容器を拾いに行き、私は自分の立てた水音にびっくりして泣いた。私の水辺での思い出の一つだ。その年もホタルはたくさん飛んだ。

祖母が亡くなって初めての夏、私はカワニナを撒き忘れた。カワニナ撒きは祖母が中心になって行っていったものなので、法事やら何やらがやると落ち着いた頃には、ホタルの幼虫の季節を過ぎてしまっていたのだ。もうそれなりに大きくなっていった私は、ホタルがもういなくなっているかもしれないと不安に感じつつ、夜の小川まで下りていった。着いた先は真っ暗だった。ホタルの光は一つもない。なんだか怖くなって、手を叩いてホタルを呼んでみた。すると視界の端がチカチカする。その方を

見る。やっぱりホタルだった。夢中で手を叩く。叩く度に光が増える。増えていく度に安心した。昔から変わらずに流れるきれいな水が、私が忘れてしまっていた間もホタルたちを守ってくれたのだと思った。

「来い、来い、ホータル来い。こっちの水はあーまいぞ。あっちの水はにーがいぞ。」そう歌って、祖母と一緒にホタルを呼んだこともある。そしてホタルそのものだけでなく、ホタルをめぐる様々な思い出が私の宝物となっていることに気づいた。あまくきれいな水が、私のその宝物を守ってくれたように、私もこの水をずっと変わらず守っていこうと思った。

しかし全国的にみると、ホタルなどの水生生物は年々数を減らしているらしい。これは、河川の汚れ、特に中性洗剤による汚物の沈殿や、農薬や化学肥料の使用により、水が汚れたり餌が減少したりしたことが原因だそう。私は美しい水と一緒に、そこに生きていた生き物や風景、そこに住む人々の思い出もなくなってしまったら悲しいと思った。そして、これらをこの先も守っていくためにはどうしたらよいかを考えた。考えた結果、まずは身近にある川の清掃活動に参加することにした。行動を起こすにあたって、世界中の水をきれいにする、だとまだ私には広すぎてピンとこない。けれど、近所の川のごみを拾う、であれば、問題を具体的なものとして肌で感じられるからだ。もちろん、日々の生活の中でも水を汚さずに節水などを心がけていく。

私はホタルや小川が昔と変わらずにあることが嬉しいし、安心する。人は水と共に生きてきた。海や川の思い出を持つ人も多くいるだろう。皆がその思い出を安心して大切にできるよう、私は水をこれからも守っていききたい。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

「輝け 日本の天然水」

宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 三年 崎田 莉央

私は今年、目の手術をします。小さい頃から目が悪かったので、毎年、目の神様のいる神社のお祭りに行っています。そこでは、神社の山の湧き水である御神水が販売されており、目を洗うと眼病が治ると言われています。この湧き水は、誰でも自由に汲むことができるので、行ってみることにしました。

実際に見てみると、本当に純粹な天然水で、心が洗われていくような心地良さを感じました。手に湧き水を溜め、「目が良くなりますように」と願いをこめて目を洗いました。

並んでいる人の中には、湧き水を飲んでいる人もいました。普段水道水を使用して生活している私は、何も殺菌せずに飲める湧き水があることを知ってとても驚きました。

そこで私は、災害などで水道水が使えなくなった際に、天然の湧き水や井戸水、川の水を生活用水として活用できるのではないかと思いました。被災した際に必要な三日分の水を確保できなかったときに、地域の天然水が活用できることを知っていたら心強いと思います。そして、その天然水をきれいに保つことが、災害時の安定した生活につながります。

今から十九年前の九月に台風十四号が宮崎県を襲い、記録的な豪雨をもたらしました。多くの河川が氾濫し、一級河川、大淀川の下流域である宮崎市は、大きな被害をうけました。宮崎市の多くの地域で長い間断水になり、祖母の家でも水が出なくなりました。しかし、祖母の家には、キッチンや手洗い場、お風呂場に井戸水が通っているため、不自由なく暮らすことができたそうです。お風呂にも毎日入ることができ、洗濯もできたのは井戸水のおかげだと話してくれました。

私は祖母の話聞いて、大淀川について調べてみようと思い、「大淀川学習館」という施設に行きました。その施設には、古くて大きい「揚水ポンプ」が展示されています。揚水ポンプは、大淀川を直接汲み上げる

もので、昔から発生していた大きな干ばつから救うために昭和二年に購入されたものでした。当時、水騒動まで発生した干ばつでしたが、この揚水ポンプを設置してからは、田畑が潤い、平和な生活を取り戻せたそうです。

今も昔も、井戸や揚水ポンプなどの技術と天然水に助けられていることが分かりました。今は水道水があるため不自由なく暮らせていますが、いつ災害がおきて、日常生活が著しく制限されるかは分かりません。備蓄水の一つの選択肢として、地域の天然水を活用するために、必要なことを考えました。それは、身近にある井戸水や湧き水、川のを把握することです。さらに、きれいな天然水を私達が後世に残すことも忘れてはいけません。

そこで私は、宮崎市にある湧き水をインターネットで調べました。県内には百ほどあるようですが、宮崎市には見つかりませんでした。しかし、私は実際に天然の湧き水を見ています。もしかすると、湧き出ている量が少ないなどの理由で、湧き水として認められていないのかもしれないと思いました。

インターネットにはのっていないなくても、確かに存在する湧き水があります。それを知るのには、地域に長く住む方々です。話を聞いてみると、意外な場所に湧き水を発見することができるはずですよ。

日本は天然水に恵まれている豊かな国です。きれいな水を守り、輝かせて未来へ繋いでいく。これが日本に住む私達の使命だと思います。水がきれいだからこそ、困ったときに活用することができるのです。私個人でできることは小さなことかもしれませんが、それが積み重なれば、水資源を守ることにつながります。「これが日本の天然水だよ」と後世で胸をはれるようになりたい。湧き水と井戸水に触れて多くのことを学んだ私は、強くそう思いました。

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

水道大国ニッポン

ベトナム ホーチミン日本人学校 三年 中田 風咲

「うわ、また出た。」目をこすりながら蛇口をひねった直後、水道が今にも破裂しそうな音をだしながら、勢いよく出てきた。小さな汚れをたくさん含んでいる茶色に染まった水を見て、今日も落胆する。そうだ、昨日は断水だった。別に、驚いたり叫んだりはいらない。この水を見るのが何回目か数えきれないからだ。日本から飛行機で約六時間、カンカン照りの太陽とおびただしい数のセミの鳴き声と共に始まるベトナム、ホーチミンの朝だ。

人口一億人目前、現在急激な経済成長を遂げている国ベトナムでは、年々増え続けている高層ビルの建設や交通機関の発達に伴う、深刻な環境問題が課題となっている。その中でも近年、より問題視されている環境問題が「水質汚濁」だ。ベトナムの水質汚濁の原因は生活排水や産業排水、市民による河川や湖へのゴミのポイ捨てなど複数の要因があるといわれている。

私がベトナムに越してきてから約二年、日々の日常の中で「汚い水」を感じる機会が沢山あった。大雨が降る度に排水溝から汚い水があふれ出し、バイクを降りて押している人々の姿。有名なメコン川の船の中からみえるのは、透明とは正反対の水。これまで私が暮らしてきたシンガポールや日本とはかけ離れていた。

「なぜ日本の水は、綺麗で安全なのか。」様々な場面で、幾度も頭に浮かんできた疑問。この疑問を抱えながら、ベトナムから初めて日本に一時帰国をしたとき、この疑問の答えが少し見えてきた。

祖母の家で夕食の準備をしている時、祖母が当たり前のようのみそ汁に使う水を蛇口から鍋に入れていた。私はベトナムの蛇口の水が頭をよぎり、驚きながら「え、蛇口の水で大丈夫？」と、とっさに口にしてしまった。すると祖母は、笑いながら私にこういった。「何を言っているの。ここは日本よ？大丈夫に決まっているじゃない。」私はこの言葉を聞いた時、祖母の日本への信頼の強さに驚いた。この祖母とのエピソードだけにとどまらず、公衆トイレの洗面台の水で歯磨きをしている女性、公園の蛇口から水を飲んでい

る少年など東南アジアの国々ではとても見かけられないような光景をベトナムに帰るまでの間、たくさん目の当たりにし、日本人の自国の水への信頼の大きさを強く実感することができた。日本の水がこの信頼を得るまでには、きつと多くの方々の努力と時間が費やされてきたことだろう。私は水の整備に尽力をされた先人の方々へ思いを馳せた。

日本は明治十年に起きたコレラの大流行をきっかけに、明治から大正、昭和、平成、そして令和、約百四十年の時を超えて、上水道の普及率九割、下水道の普及率八割を超える世界有数の水に恵まれた国に発展したとのこと。現代の日本に住む人々が祖母のように、当たり前のように水道水を使っているのには、日本の水資源を豊富に手に入れられる自然の恵みに加え、先人たちの努力の賜物であることを身染みて感じた。

現在、百九十六か国ある国々の中で水道水が安全に飲める国は僅か十二か国だという。安心して飲める水が身近になく、苦労している人々が大多数の世界の中で、蛇口の水が飲めるという恵まれた環境の日本に生まれたことに、私たち日本人は感謝しなければならないと思った。

私が住むベトナムでも、日本のJICAを含めた支援団体により、下水道・排水システムの整備の支援が行われているという。二〇五〇年までの先進国入りを目指すベトナムにとって、水の整備は重大な課題の一つであるだろう。二十六年後、私は四十歳を迎えているが、その時にはベトナムに足を運び、ベトナムの蛇口をひねって、透明の綺麗な水を見て、感激の声をあげてみたい。

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

おばあちゃんとの旅

香川県 高松市立国分寺中学校 三年 山下 花音

「あんた、水使いすぎやで。」

私のおばあちゃんの口癖である。正直、おばあちゃんの気持ちが一番理解できなかった。今では、蛇口をひねったら、いつでも水道から水はでてくるし、使いすぎても世界中から水がなくなるなんてありえない。時代遅れの口癖であると思い、いつも聞き流していた。しかし、おばあちゃんが行ったため池と香川用水記念公園、おばあちゃんの農業の手伝いという経験が私の水に対するイメージを大きく変えた。

瀬戸内海型気候に属する私たちの地元である香川県は、非常に温暖でかつ乾燥した気候を持つことで有名だ。年間降水量も、千五百ミリと、他県と比較しても非常に少ないという特徴がある。私たち讃岐県民が「うどん県」と誇りをもつ、うどんに使われる小麦もこのような気候だからこそ育てることが可能である。しかし、私は、この気候がどれほど多くの人の暮らしを困らせ、過去の人々がそのことに立ち向かって今の私たちの快適な暮らしにつながっているのかを全く知らなかった。私は、おばあちゃんに連れられて、ため池と香川用水記念公園に行き、香川県の水の歴史について学ぶことになった。香川県は昔、「早天五日に及べば水湿の潤いなく霖雨二日に及べば洪水の恐れあり」と言われるほど、飢餓者が続出するほど雨が降らない時期が長期間続いたり、時には、大雨による鉄砲水や暴風で民家や農作物等に深刻な影響を与えたりするなど、人々を悩ましていた。それに立ち向かったのが西嶋八兵衛をはじめとする先人たちなのである。彼らは、数年で九十余のため池を築造したり、東西に流れる香東川とよばれる川を一本化したりして問題解決を図ったのである。また、その何十年後に、ため池に加えてより十分な用水の確保を行うため、香川用水が建設されることになった。香川用水とは、高知県の早明浦ダムを水源に、徳島県の池田ダムを経て、香川県に水が供給されている多目的水路である。このように、今私たちが当たり前のように水を使っていることは、当たり前前の自然の成り行きではなく、多

くの人々の苦労や努力、他県との協力があるからこそだと気づかされた瞬間であった。おばあちゃんは、そのことを私に伝えたかったのだと思う。

私のおばあちゃんは、農家であり毎年多くの農作物を育てている。この夏私は、農家を少し手伝った。すると想像以上に大変であった。朝と夜に満遍なく水をかけなくてはならない。気温が三十度を超えても台風が接近していて風が強くなっている、水をかけたり、手入れをしたりしなければならぬ。おばあちゃんに圧倒されるばかりだった。おばあちゃんの家で食べた、ミニトマトや茄子、キュウリのサラダは、水分を多く含んでいて、とてもおいしかった。おばあちゃんは、「今は昔よりもほんまに楽になったわ。」と言っていた。昔は、水を井戸からくむ作業から始めないといけないため、今よりもっと労力をかけなければならなかったそうだ。おばあちゃんとの旅によって、私は水を使うことの大切さや、先人たちの努力に感謝しなければならぬことを肌で感じる事ができた。お盆になって、はとごがおばあちゃんの家遊びに来て、水鉄砲で遊ぶため、水を大量に使っていた。

「あんた、水使いすぎやで。」

おばあちゃんの言葉がいつもより新鮮に聞こえた。

シャワーズ賞（優秀賞）

未来へ繋ぐ水源

徳島県 鳴門教育大学附属中学校 二年 柳本 紗那

「いただきます。」

私は、祖父母の作るお米が大好きだ。我が家の米作りは、少し変わっている。

私の住んでいる吉野川市は、日本三大暴れ川として有名な吉野川が、県を東西に流れている。この川のおかげで、徳島県では水不足に陥ることが、あまりない。だが、私の住んでいる所は、山の麓であり、米作りの際、水を引く川がない。そのため、我が家の米作りの水源は、家のすぐ横にある小さな皿池を利用する。皿池とは、窪んだ土地の周りに堤防を作って築いた、小さなため池のことだ。

毎年、稲が丈夫に育つまでの約四ヶ月間、皿池の水を常にはって水田に水を送り続けなければならない。祖父はその期間、毎日皿池の様子を確認し、水田の水位を調節し、管理してくれている。私は、田植えを終えたばかりの小さな稲苗が、朝日に包まれ、きらきらとした水田の中でしっかりと根を張って踏ん張っている、その光景が大好きだ。なんだか私も頑張ろうと背筋がピンとする。そして、水は、稲が立派に育つよう見守り、しっかりと支えている。稲にとって水は母のような存在なのだろう。秋になると、たくさん水を吸って大きくなった稲を家族総出で収穫する。我が家は、昔ながらの方法で、稲を刈って束ね、それを逆さにし、一週間程度干すのだ。そうすることによって、茎の養分が米に行き渡り、太陽に干すことよってアミノ酸が増え、旨味が増すそうさ。この手間暇かけた我が家のお米を近所の甘く美味しい湧水で炊くと、最高の逸品となる。

しかし、数年前の梅雨時、雨がほとんど降らず、皿池の水位が低下し、干ばつ被害に直面した。そのとき、家族総出で何往復もしながら川の水を大きなタンクで運んだのを覚えている。これは、祖父も経験したことがないと言っていた。私の母が小さいとき、この皿池の水位は今よりはるかに増していたそうさ。この皿池は、カブトエビやヤゴ、渡り鳥が飛

んでくる。ついこの間、皿池で沢蟹を見つけた。沢蟹を見つけたのは、初めてだった。たくさん生物が生息しているという事は、生物たちにとっても、良い環境なのだろう。皿池は、たくさん生物たちにとって、生きるための大切な住処なのだ。

私は、今まで梅雨に降る雨が好きではなかった。気温が高く、雨が降ることで湿度も上がり、とても生活しづらい。おまけに、雨が降ること通学にも影響がでる。だが、この雨こそが、米作りに必要不可欠な水源となることを知り、考えが180度変化した。この雨が山に降り、やがて川や皿池に集まり、私たちの生活に直結する。そして、私たちはこの雨によって、この水によって、今生きているのだ。この美味しいと言って飲んでいる水、美味しいと言って食べているお米や野菜、それはいつまでもあり続けるものではない。

近年、地球温暖化が進み、気候変動が増加している。降水量が多くても少なくても、気温が高くても低くてもいけない。ちょうどいいころ合いが必要だ。私たちはこの資源を守り続ける義務がある。水は、私たちにとって一番身近なものであり、だからこそ、その大切さや危機に気づきにくい。

私は、この我が家の米作りを受け継いでいくために、皿池を、そして水を守っていかなければならない。この冬、祖父は少しでも皿池に水が溜まるよう、重機で掘って整備した。私も美味しい米が滞りなく作れるように、そして生息する生物たちが安心して暮らせるようにと願い、皿池に落ち込んでいた、竹林や木を撤去するのを手伝った。これからも私にできることを探し続けたい。

あなたも身近なものを通じて、水を守るためにできることは何か考えてみてほしい。これはどうなっているのだろうと思ったとき、それがあなたの新たな始まりなのだ。

中央審査会特別賞（優秀賞）

「地域をつなぐ水」

宮崎県

宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校

一年

林 はる

私は、宮崎県綾町という人口七千人ほどの町に住んでいます。綾町には、深い照葉樹林が広がっていて、そこから湧き出す水は澄んでいて名水百選に選ばれた「綾川湧水群」があり、ユネスコエコパークに認定されています。

小学校の授業で、そんな綾町を流れる川からとった水道水と下流の宮崎市の水を飲み比べると、綾町の水のほうがおいしいと思いました。しかし、同じ綾町でも家で飲んでいる水はもっとおいしいと気づき、家の水道水について調べることにしました。

私の家は綾町の中心部から離れた、山の中の尾立という地区にあります。尾立地区では、綾町の水道水ではなく、尾立水道組合の水を使っています。私は、長年水道組合の係をしていたおじいさんに話を聞いてみました。

尾立地区では、五十年前にみんなの総意で水道について決め管理する水道組合という仕組みを作りました。役場が供給する上水道ではなく、地域の人が交代で機械係、会計係などの仕事を行い、水道水に入れる薬についても自分達で考えて決めることができます。

川の水は雨が降るとろ過しても濁ってしまうため、綾北川の地下二十メートルのところから、ポンプで水をくみ上げています。

この水は、まず養豚センターという施設のタンクに行き、そこから水道組合のタンクへと運ばれます。そして、そこで四段階に分けてろ過されます。その後およそ三十世帯へ運ばれていきます。

尾立の水がおいしい理由の一つに、消毒薬が入っていないということがあります。消毒をしなくても、菌がほとんど含まれていません。さらに、ミネラルやカルシウムなどの栄養分も多く、pHという数値も宮崎市は五・二、綾町は五・八と酸性ですが、尾立は七・一と中性に近く、体にもいいそうです。

尾立の水道組合で大変なことは、水道を利用して全世帯の人が参加して、自分たちでタンクやポンプ場の草刈りや掃除を行い、二か月に一度検針をすることです。また、台風が来ると電線が森の中を通っているため停電しやすく、停電するとポンプが止まって、断水してしまうこともあります。

私は、水道組合のタンクの見学がしたいと思い、母と一緒に見に行きました。山の中に鍵のかかった門があり、鍵を開けて急な坂を上っていると、山の頂上にタンクがありました。タンクは、思っていたよりも深く、底に砂が沈んでいて、上の方のとてもきれいな水が、少しずつ次の槽に流れていました。タンクでろ過するだけで、こんなに水がきれいになると知り、驚きました。

上水道の場合は大腸菌が少しでも入っているといけないので消毒する必要がありますが、簡易水道は、水を使う人々が消毒するかどうかを自分達の責任で決めることができます。尾立の水もほんの少量の大腸菌が検出されることがありますが、その危険性を分かった上で、消毒薬の味がしないおいしい水を選択してきました。

このような問題について、色々な人の多様な考えを聞き合うことで、みんなが納得いく水道水を作っています。水を通して地域の人々がつながることができているのではないかと思います。

自分が毎日飲んでいる水について知ったことで、水を守ることは川や森を守ると同時に地域の人々のつながりを大切にしていくことだと考えるようになりました。これからも、地域の一員として、水道組合の清掃に参加するなど、尾立ならではの水道水を大切にしていきたいと思えます。

入選

水と命

北海道 下川町立下川中学校

一年 三浦 かりん

私の母は少し変わっている。「広い世界を知るため」と言いながら、私と妹の学校を半年間お休みにしてメキシコとカナダに三人で滞在している。基本的に、朝、勉強を終わらせて、午後は美術館や図書館、遺跡など様々な場所に連れて行ってもらっている。メキシコシティでは移動の足であるバスがよく止まる。その多くはデモで道が封鎖されるためだ。その日は一時間歩いて美術館まで行く羽目になった。

メキシコは、デモが多い国で住環境の改善や女性の地位向上など様々なデモを見かけた。ニュースで見たとこその日のデモはキレイな水を求めるものだった。デモの垂れ幕は *Agua y la vida*。「水と命」。

メキシコは、そもそも水道水を飲むことができない。水質が良くないらしい。シャワーや歯磨きくらいなら問題ないが、料理や飲み水には使えない。浄水器を通して飲むか、コンビニでリットルの水を買って、部屋まで運んで使わなければならない。しかも、暑く乾燥した国なので日本にいた頃よりもずっと喉が渇きやすい。それなのに、キレイな水を求めるデモとはどういうことか？

調べてみると、メキシコでは数年前から水不足が深刻で、断水により週に二〜三回しか水道から水が出ない地域もあるそうだ。しかも断水は、いつ終わるか分からず、何日もシャワーを浴びられないことすらある。水を使うメキシコ伝統の祭も中止に追い込まれた。大きなタンクを買う余裕のある住民は、水を売る給水トラックから普段の何倍ものお金を払って水を買う。

しかし、こんなに水がないと騒いでいるのにコンビニには数え切れない種類の砂糖入りジュースが並んでいる。この話をメキシコ人にする意外なことがわかった。

メキシコの貧しい地域では、清涼飲料水の工場を誘致しその条件として工場に優先的に水を供給することを約束した。当時はここまで水が不

足していなかったが環境破壊と異常気象が続き、十分な量の雨が降らなくなってしまうのだ。

人々の日常水が供給されないにも関わらず、清涼飲料水は簡単に安価で手に入るため人々は水の代わりに砂糖入りジュースを飲む。メキシコ人は一人一日約二リットルの清涼飲料水を飲む。貧しい地域に工場を建て豊かにしようとした結果、雇用が生まれ経済は潤ったが、住民の生活が水不足になってしまった。

レストランでは、お水が出てこないのだから飲み物を頼む。私と妹は普段日本ではあまり頼まない砂糖入りジュースを買ってもらい、大喜びだった。しかしメキシコでは、幼い時から砂糖入りジュースを飲むので、糖尿病や肥満などが大きな社会問題となっている。

これを知ってから私達のような旅人が大事な水を無駄にできないと思いつつもよりも水を大事に使っている。元々我が家の水の使用量はひとり暮らしと同じくらいなので、これ以上節水するのは難しいが、シャワーの水量を減らして頑張った。

「世界中の人がキレイな水を飲むためにはどうすれば良いと思う？」そう母は問いかける。私にできること？メキシコに住んでいないのにできることはあるのか？よく考えると、メキシコの水不足は環境破壊が原因だと言われている。これは国境に関係なく世界全体が関わっている問題だ。

私は、日本では月一回ゴミ拾いをしている。それは、自分達の街をキレイにするためだ。私は、今いる場所でもゴミ拾いをすることにした。なぜなら、私は地球という大きな惑星をみんなとシェアしているからだ。小さな活動だが、世界中の人がキレイな水を飲めるように、今日も私は自分のできることをやる。

入選

未来のために水と向き合う

福島県 葛尾村立葛尾中学校 三年 松本 晴樹

お正月、テレビを見ていると揺れを感じた。放送がすぐに切り替わり、能登半島沖の様子が映し出された。ひどい揺れ、津波警報、新年早々の平穏なお正月ムードも一瞬にして遮られた。ニュースで溢れる水やぐちやぐちやになった建物を見る度に心が痛くなった。

東日本大震災では福島県も甚大な被害を受けた。私の住む葛尾村は双葉郡にあり、山間部にあるため地震と原発事故の被害はあつたものの津波被害は免れた。私は震災当時、産まれたばかりでもちろん記憶はない。避難先を転々としたことなど、理解できるようになってから家族に聞いた。

こうした自然災害には、水が関連している。津波、河川の増水、土砂災害。水は有限の資源として大切にし、大事にしなければいけないが時に自然災害として牙をむく。私は海も川も大好きだ。今住んでいる葛尾村は、川のせせらぎを楽しめる環境にあるから余計にそう思う。私たちは、自然を守るために環境に優しい生活を心がけている。エコバッグを使い、水筒を使い、トイレは小で流す。水を大切に使うことが以前よりは定着してきている。そして、水の自然災害から自分たちを守る対策も同時に立てていく必要がある。エコな生活と、災害に備える準備を同時に。有限である水の使い方、いっどこで起こるかわからない災害に備えるのだ。私たちの生活と水は結びついている。だからこそ、真剣に今、向き合わなくてはならない。自分には関係ないと、見て見ぬふりをしないことが一番大切だ。

当たり前の日常が「当たり前」ではなくなったときに気付くのでは遅い。水が無くなったとき、津波や水害に襲われたとき、そのときに日常の素晴らしさや大切さに気付くのではなく普段から水について意識して過ごさなければならぬ。自然災害を防ぐことは困難だが、自然を理解し、私たちが対策を立て、備えることは可能だ。

総合的な学習の時間に、村役場を訪れ、村のハザードマップの説明を受けた。備蓄倉庫の見学に行ったりした。村民が三日過ごせる量の食料や毛布、おむつなども積み重なっていた。今回見学したことで家族とも災害時の行動、避難経路について話し合えた。山に囲まれた葛尾村だからこそ土砂災害が起きた際、慌てないためにも確認しておくことが必要だ。いざ被害に遭ってもハザードマップに従い安全な道を通って落ちて避けることができる。村民のみなさんにもマップの使い方や危険箇所をもう一度提示していきたい。

今年度、村の復興交流館で学習成果物を販売し、売り上げたお金をユニセフに募金した。家庭科で作成したバッグや張子、国語で作った漢字キーホルダーを一つ百円で売り、一万八千五百五十円を寄付した。ユニセフでは世界中の村々に、清潔な水を届けられるよう井戸などの給水設備を作っているそうだ。私たちの活動が、少しでも世界中で水に困っている人のためになれば嬉しい。汚い水を飲むしかない子供の未来を、明るく照らしてあげたい。水の環境が悪い方々は世界人口の半数以上もいて、苦しんでいる。日々のありがたさを忘れないことが、当たり前の日常に感謝する一歩に繋がる。これからも積極的に募金活動を行きたい。そして、私たちは能登半島沖地震を受けてさらに募金活動を行った。ユニセフに協力したときと同様に張子やバッグを売り、チャリティ形式にした。微力ながら一万四百円を寄付することができた。

水は私たちに当たり前の生活を与え、ありがたい日常にしてくれる。一方で、水の自然災害は尽きない。水について一人一人が考えていかなければならない。能登半島沖地震で被害に遭われたみなさんや世界中の水に困っている人々の笑顔が戻りますように。世界が人を豊かにする水に溢れることを願っている。

入選

ふるさとの水を思う

福島県 須賀川市立第三中学校 三年 角田 紗羅

元日から能登半島を襲った最大震度七の大地震。震源からこれだけ離れているというのに、私の住む福島県でも震度四を記録し、緊急地震速報に心がざわついた。すぐにテレビをつけると、土煙をあげて崩れる多くの家屋と、大津波警報の文字が目飛び込んできた。東日本大震災の時と同じだ。「早く逃げて！」画面に映る歩行者や走行中の車に向かって、届きもしないのにそう叫んでいた。

テレビでは、連日被災地の様子が放送されている。多くの家屋やビルまでもが倒壊し、津波が襲った能登半島。そこに息づいてきた人々の生活や営みが一瞬にして飲み込まれた。「今一番足りないものは何ですか？」多くの被災者の方が、「水と燃料」と答えていた。私たちの時も同じだった。毎日ガソリンスタンドには長蛇の列。並んでも給油できない日々が続いた。そして、最も困ったのが水だった。私の住む須賀川市では水道が使用できなくなり、断水は一か月近く続いた。蛇口をひねっても一滴の水も出ない。「当たり前」だと思っていたことが、「当たり前」ではなくなった瞬間だった。給水所に何時間も並ぶ毎日。そもそも、水を汲むためのポリタンクすら我が家にはなかった。おもちゃを入れていたケースにゴミ袋をかけて、両親は給水所に並んでくれた。当時の話を家族に聞くと、「いかに水が必要不可欠なものか」を思い知ったと言う。洗濯はもちろん、入浴も何日も出来ず、料理も洗い物も出来ない。歯磨きは最低限の水で済まし、あれだけ苦労して運んできた水はトイレを流すために一瞬でなくなってしまう。放射能の心配もあったからだと思いが、生きるのに必死だったと話してくれた。今現在、能登の方々も同じような思いをされていることに心を痛め、何も出来ない自分にも虚無感を抱いている。被災した人々は不自由さと不安と闘っているはずだ。日本は何度自然災害の恐怖を目の当たりにしなければいけないのか。当時福島県にも自衛隊や全国の水道局の方々が駆けつけ、給水や水道管の復旧に尽力して下さった。私の家の近くにも給水車が来てくれて、近所の

おばあちゃんは泣いて喜んでいて。能登の被災者の元にも早く救援の手が届くように祈っている。

福島県は阿武隈川をはじめとする約五百の河川に恵まれ、県民の半数は阿武隈川流域に住んでいる。小さな頃はいわきの海で泳ぎ、猪苗代湖で水遊びをした。私の住む須賀川市も阿武隈川と釈迦堂川が接し、清らかな水により緑豊かな自然に囲まれている。桜や牡丹など四季折々さまざまな花が色づき、川や海には魚や虫などの生物が命を育む。五月の中旬を過ぎると、田んぼに水が張られ、代掻きがされる。田んぼに張られた水がキラキラ輝く様子がとても美しいし、田んぼの瑞々しい生きた匂いが私は好きだ。人間をはじめとする全ての生物は、水によって生かされていると言っても過言ではない。震災に見舞われたことにより、水による恩恵と脅威の両面を経験した。地震、津波、放射能の困難に直面し、復興を支えたのは「当たり前」の日常への感謝だったのではないだろうか。断水以降初めて出た水。初めて灯った電気。これらの感動が今でも忘れられないし、溢れる感謝が、苦難に負けず歩き出そうという意欲につながったのではないかと思う。水は限りある貴重な資源だ。震災以降ずっと我が家では節水を心がけている。水に恵まれた日本に生まれ、当たり前のようにきれいで安全な水を飲んでいる自分はいかに幸せであるかを再認識した。これからも人と水が共存していけるように、未来の水を守るために私たちは何ができるかを一人一人が考え、行動に移していくことが重要だ。行動の輪が広まり大きな力となり、ふるさと清らかな水を未来に受け継ぐことが出来ると信じている。

入選

良質な水のために

神奈川県 川崎市立西生田中学校 三年 加藤 孝祐

「トイレから蛇口へ」

その記事のタイトルを見たときは驚いた。米国のカリフォルニア州では長期にわたる干ばつで水が不足している。そこで既に使われたトイレの水などの廃水を、様々な段階を経て消毒し、飲料水として再生利用することを発表したそうだ。調べてみると、カリフォルニア州だけでなく水資源が少ない多くの地域や国が、廃水を飲料水に再生する取り組みを始めているらしい。

この現実を知って僕は衝撃を受けた。浄化したとはいえ、トイレに使った水を飲むのは抵抗がある。ロサンゼルスに住む僕の尊敬する大谷選手も、その再生水を飲むのだろうか。いつか日本もそうなっていくのだろうか。水不足はそれほど深刻なのか。僕は自分が住む神奈川県の水事情について調べてみた。

神奈川県には相模川水系と酒匂川水系に設けられた四つのダムがあり、県民が必要とする水の「量」の心配はほぼ無いらしい。しかし、水の「質」という点で大きく二つの問題がある。ダム湖周辺地域では生活排水対策が不十分で、ダム湖の窒素やリンの濃度が上がり水質が悪化していること、また雨水を蓄える水源地域の森林整備が遅れ、雨水をゆっくり流す森林の機能が低下していることだ。

そこで神奈川県は、県民への良質な水の安定的確保のために「かながわ水源環境保全・再生施策大綱」をまとめ、平成十九年から二十二年間、四期にわたりこれらの問題に取り組んでいる。第一期から第三期では、水源地域周辺の森林の整備が進み、下草の成長が見られるなど森林の機能が向上してきた。また、ダム湖上流地域での生活排水の処理率も向上し、水質が徐々に回復している。しかし、ダム湖のリン濃度は依然として高く、また台風などの自然災害を見据えた森林の土壌保全も必要である。令和四年から始まった第四期ではそのような課題に取り組み、「良質

な水の確保」に力を注いでいるらしい。

神奈川県が県民のために必要な水の「量」を確保するだけでなく、その「質」を考え、より良質な水を県民に供給する努力をしていることを初めて知り、きれいな水を守るために自分にもできることはないか、と僕は考えた。水道水は主に河川の水が使われているので、良質な水を確保するには川の水質を保つことが大切だ。そのためには生活排水を見直すことが鍵となる。生活排水は恒常的に排出されるため、河川の水質への影響が大きくなるからだ。特に台所から出る排水は河川を汚す原因となり、コップ一杯の牛乳を流しただけで、魚が棲める水に薄めるのに浴槽十四杯分の水が必要になるといふ。しかし台所からの汚染は一人一人の工夫で減らすことができる。例えば、食器に残った油は紙で拭いてから洗うようにしたり、調理くずはネットなどを使って極力流さない。また、米のとき汁は植木の水やりに使う。国や県だけに対策を委ねるのではなく、個人が水の問題を自分ごととして考え、小さな手間を惜しまないことが河川の水質改善につながる。僕は今まで何も考えずに台所に油を流していたが、これからは水が汚れないような行動を心がけたい。そして、神奈川県の水源環境保全活動や、自分達でできる様々な対策を、僕も周りの人達に伝えて協力者を増やしていきたい。それが神奈川県だけでなく、日本、世界の水質改善につながるはずだから。

今は神奈川県の水量は十分かもしれないが、地球温暖化などの環境の変化で水量が不足する日が来るかもしれない。そんな時のためにも僕は水を大切に使いたい。トイレの水の再生水よりも、おいしい神奈川県の水をこれからもずっと飲んでいきたいから。

入選

水と生きる社会

新潟県 十日町市立中条中学校 二年 玉田 佳暖

私たちは、毎日何気なく水を使っています。私ももちろん何気なく水を使っているのです、今まで興味を示すことはありませんでした。しかし、ある二つの本に出会ってから、私の興味の世界は変わりました。

小学生だった頃、私は「ひみつシリーズ」という本を読んでいました。みなさんも一度は読んだことがあるのではないのでしょうか。ある時私は、図書室にあった「エネルギーのひみつ」という本を取りました。その本には、現在注目されている「再生可能エネルギー」のことが書かれています。再生可能エネルギーには、「太陽光発電」や「風力発電」などの様々な発電方法が載っていました。その中でも、私が一番興味をもったのが「水力発電」という再生可能エネルギーでした。

水力発電は、天候の影響を受けにくく、二酸化炭素を出さないのです、水はエコなエネルギーだということがわかりました。この本のおかげで、私の水への興味の第一歩を踏み出せました。

水への興味がわいた私は、中学生になったばかりの頃、図書館で「燃料電池自動車のひみつ」という本を手に取りました。その本には、水素で動く「燃料電池自動車」のことについて書かれていました。燃料電池自動車は、走行している時に二酸化炭素を排出せず、水だけを出す究極のエコカーだということがわかりました。私は特に水と電気をつくる仕組みについて不思議に思いました。

それを知った時に私が興味をもったのは、「水の電気分解」というものでした。水の電気分解は、水に電気を流すと、水素と酸素が発生することです。しかし、燃料電池自動車は逆で、水素と酸素を発生させて、水と電気をつくるという仕組みでした。私はこの仕組みに驚いて、燃料電池自動車への興味がわきました。

さらに、燃料電池自動車には、走るだけでなく、すごい機能があるのだと知りました。それは、非常時のバッテリーとして、燃料電池自動車

が発電した電気を使えるということです。この機能を知って、さらに燃料電池自動車への興味が高まりました。

しかし、燃料電池自動車が発電させている水素は何でつくっているのかがわかりませんでした。気になって調べてみると、燃料電池自動車の水素は、天然ガスや水で作っていることがわかりました。しかし、天然ガスは二酸化炭素を排出してしまうので、主に水でつくれるようになってきたら私は嬉しいのです。

今まで私は、水は「使うもの」というイメージが大きかったのですが、この水の素晴らしさにふれている「エネルギーのひみつ」と「燃料電池自動車のひみつ」という本と出会って、水に興味をもて本当に良かったです。

私はあの二つの本を読んでから、燃料電池自動車を使った新しい水の活用の仕方について考えるようになりました。私は、非常時に使える電気以外にも、水も使えるようになっていたらいいなと思いました。実際にそんな風になったら私は嬉しいのです。

私たちが何気なく使っている水は、飲み水、風呂、洗濯、そして発電など、様々な場面で使われています。水が家庭や施設に送られるまでには、たくさんの人が関わっています。人だけではありません。雨や山などの大きな自然の力も関わっています。水に関わっていないものはありません。この世界の全てが水に関わっているのです。私たち人間と水は、「つくる」・「つかう」・「つながる」の関係で結ばれているのです。

私はこれからも、水の大切さや素晴らしさについて考えていきたいと思っています。そしていつか、水の大切さや素晴らしさについて、水に興味がある人にもない人にも伝えていきたいです。

入選

水が与えてくれる幸せ

新潟県 新発田市立佐々木中学校 二年 前田 七海

「起きて！」と母に言われ目が覚める。寝ぼけまなこで朝御飯を食べ、蛇口から水を出して顔を洗い、そして歯を磨く。支度が済んだら、太田川の上の橋を渡り学校へ向かって歩きだす。季節によつては道端にある雫がかかった輝く景色。学校に着いたら花に水やりをする。これが私の日常だ。毎日私たちは常に水に囲まれ、その恵みを享受している。水は私たちに幸せを与えてくれるのだ。これがどれだけ幸せなのか、どのくらいの人が自覚しているのだろうか。私も含めて。

私の住む新発田は、太田川が流れており、田んぼが広がり、自然に囲まれている、水に守られている美しい町だ。私は美味しいご飯や味噌汁を食べ、水を飲み、住んでいる人たちも水のおかげで元気が溢れている。私がそれを「当たり前」と思っていた。しかし、この考えは「大きな間違いだ」と、ある出来事で気持ちが変わった。

令和六年一月一日。突然「能登半島地震」が石川県を中心に地震が起こった。そして新潟県も震度四ほどの地震が襲った。テレビをつけたら、家が潰れ、波が襲っている町があり、次の日に多くの人が避難所に避難している様子が映し出され、それはまさに残酷な風景だった。行方不明の人。亡くなった人。多くの犠牲がでた。私は東日本大震災を体験した。しかし、それは私が生まれて一歳にならない頃だったので全く覚えていない。十三歳になり震度四の地震、近くの県で起こる津波の恐怖を身に感じた。

しかし、月日が経つとその怖さは薄れていく。再び当たり前のようにお風呂に入ったり、ご飯を食べていた私。そんな時、あるお年寄りの夫婦がテレビに映っていた。その夫婦は地震の影響で家の水道が止まっていたが水道が直り、蛇口をひねり溢れる水がわき出した。それと同時に夫婦が涙ながら「よかった…幸せだ。」と笑みを浮かべた。それだけ水がない生活は大変だったのだと思った。たった一滴でもどれだけの価値が

あるのか、水がどれだけ大切なのか、当たり前がどれだけ幸せなのか今、私は改めて実感した。

「誰もが水の大切さ、幸せさを常に意識しそれを決して忘れてはいけない。」

日本は災害国と言われるほど、地震が起きやすく、時には津波が襲うこともある。水を畏怖し、一方その恵みに感謝する。生きるためには常に水と関わっていかねばならないのに、しかし、私も含めまだ水の大切さをわかっていない人が多いように思う。実際、日本の水の使用量は昭和では、一人あたり一日百六十九Lだった。しかし、平成、令和と増えていき、今では二百L以上の水が使われている。これは世界の水の使用量の平均より約二倍も使われている。それに比べ、世界には一日あたり二十Lしか使えなく、汚れた水を使う国もある。私たちはそれを自覚しないとイケない。

これまでを振り返って、透き通ったキラキラとした川、家まで届けられる綺麗な水、美味しいご飯、緑が広がる町。私たちは、生活、自然、そして生き物の命、目に見えないところでも水に恵まれている。それでも、私たちは水に守られているのに気づかず、水を使い続けてしまっている。その結果、水不足、水質汚濁と知らないだけで、身近にも環境問題が起こっている。自分から汚した迷惑は必ず返ってきてしまう。私たちは恩を返さずに過ごすのだろうか。私たちは水に守られているが、これからの未来のためにも恩を返し、水を守らなければならない。そのために、日頃の生活に目を向けてみるべきだと思う。ありのままの水の幸せが続いていくために。

入選

水の惑星の真の姿

新潟県 新発田市立佐々木中学校 二年 江端 愛莉

「蛇口から綺麗な水が出るのは当たり前だ。」
私はずっと、ごく当たり前のことを思っていた。小学五年生であるの学習をするまでは。

私は小学五年生の総合学習で新潟水俣病について学習し、実際に水俣病になった経験のある人からお話を聞いた。新潟水俣病とは化学工場で工場排水に含まれていたメチル水銀が基となり、食物連鎖によって水銀が川魚に取り込まれ、それを人々が食べたことで起こった日本三大公害病の一つである。水俣病の主な症状は「手足のしびれ、うまく歩けない、見える範囲がせまくなる。」など人によって症状の出方に違いはあるが、その人の日常を奪ってしまう恐ろしい病気だ。発生したばかりのころは、症状の重い人がいて、ひどい場合は死んでしまうこともあったそうだ。しかし、患者の多くは外見から健康な人と見分けがつかない。語りべの人は「周りの人から分かってもらえず、ニセ患者などとして苦しみました。そして今まで仲のよかった友達からも差別や偏見をうけるようになりました。」と、私が想像していたよりもはるかに大変で悲しく苦しい病気だということを語っていた。綺麗な水の循環がひとたび崩れると、必ずその報いがある。そう思うと私はそこで毎日当たり前のように飲んで、使っている、調理しているおいしい新潟県の水の大切さについて改めて知り、自覚し、今まで「水は綺麗でおいしくて当たり前だ」と思っていた自分を深く反省した。

一方で、宇宙から見た地球は青く、人々からは「水の惑星」と呼ばれている。だが、私にとってこの考え方は間違っていると思う。なぜなら、地球の約七割が海水であり、淡水は二・五パーセントの量しかないからだ。しかも人々の飲める水は淡水の二・五パーセントのうち浅いところにある水と、川や湖などの「0・0一パーセント」しかないという。五〇〇ミリリットルのペットボトルに表すと一滴というとてもわずかな量

になる。このことから、水というものは有限であることが分かり、私達、世界の人々の使い方次第で近い未来に水を失う危険性がある。だから私は、水を思いやり大切にすることが、今を生きる人々にとって重大なことだと思っている。新潟水俣病は、水が汚染されたために起こった病気だ。人々が水を思いやり大切にしていれば起こらなかった病気とも言える。そんな水俣病という恐ろしい病気を知った日から、私は水を思いやることを誓った。食事の後お皿を洗うときはしっかりと置き、洗濯をするときはお風呂のお湯でするなど、このような些細なことでも新発田の人々、新潟県の人々、日本の人々皆で協力していけば「塵も積もれば山となる」のように大きな結果となる。昔起こった公害をまた繰り返さないためにもこのような取り組みを意識していくことが水にとって、これからの未来を生きる人たちにとっても一番の思いやりだと私は考える。0・0一パーセントの限りある少ない水を未来の人々へ残すために一人一人が大切に使うことが今を生きる私たちにとって環境への一番の優しさだと感じている。

「立つ鳥跡を濁さず」ということわざがあるよう、未来の人々へ水をプレゼントできるような心がけていくことが大切だ。今、あなたが飲んでいる水を「安全」と断言できるように自分自身でも水にどんな優しさを与えていくべきなのか考えてみてはどうだろうか？

世界中の人々がおいしい水を飲むことができるように。あの公害をもう二度と起こさないように。そして、百年後、千年後もおいしく安全な水を飲めるように。過去は変わらない、でも未来はこの手で変えることができる。そう。きっとあなただって……。

入選

島国、日本。水は循環する。

石川県 石川県立金沢錦丘中学校 三年 西 凌成

この作文を書く数日前、我が家である会話が合った。毎年、我が家は夏休みと冬休みに旅行に行く。その行き先を決めていた。

「次、どこに旅行に行く?」

「東北は?」

「え、でも、原発があるから...」

「確かに。処理水も怖いからね。」

「じゃあ、違うところにしよう。」

と、会話は続いた。原子力発電所の事故から十三年が経ち、処理水の放出から半年以上経った日の我が家の会話だった。果たして、この会話は正しいのだろうか。

僕は、福島第一原子力発電所とその処理水に対する知識が浅いから、この会話ができたと考える。経済産業省のホームページには、「人及び環境に対する放射線影響は無視できるほどである」とIAEAという国連の機関が報告書で結論したと述べられている。つまり、この処理水は安全である。この客観的事実から、東北に旅行に行っても、安全だと分かる。しかし、安全だと分かっているにもかかわらず、怖いものは怖い。一生懸命育てた子供を危険な場所に連れて行く親はいない。しかし、土地も水も、もう安全なのだ。危険ではないのだ。東北の復興を応援するためにも、東北が活気付くようにするためにも、旅行に行き、消費することは、大切なのだ。こうした消費が東北を支えるのなら、行くのを拒む理由はない。余談ではあるが、僕は、去年の夏休みに学校の行事で福島県を訪れた。石川県から新幹線で大宮駅で乗り換え福島県へ行った。埼玉県から茨城県、茨城県から栃木県、栃木県から福島県へと、大都市の風景やのどかな風景が続いていた。県をまたいでも変化はなかった。この事実からも、安全であると分かる。だが、やはり、人々の心には、恐怖があるのだ。人間は何かと自分が一番好きだ。自分が一番大切なのだ。だから、自分

の安全を優先してしまう。しかし、これは正常なのだ。

島国、日本。そして、水は循環する。つまり、処理水も循環するということだ。海へ流れ、やがて蒸発し、雲になる。そして、地上へ雨や雪として流れる。地球を何周、何十周、何百周、何千周、何万周、何十万周も、これまで循環しており、これからも循環する。しかし、それは、安全な水。その水が育む東北の魚を食べても、日本海が育む北陸の魚を食べても、おいしさも安全性も変わらない。島国、日本。そして、水は循環する。この循環のおかげで、下水道へ流れた水は、また、雨や雪として戻ってくる。処理水だろうが、日本海の水だろうが、瀬戸内海の水だろうが、琵琶湖の水だろうが、太平洋の水だろうが、オホーツク海の水だろうが、東シナ海の水だろうが、全て一つだ。なぜなら、水は循環するから。日本海の水が雨になり、滋賀県に降れば、琵琶湖の水になる。場所が違おうが、水は全て一緒だ。安全な処理水。世界でもトップレベルの安全な処理水。いや、もはや、ここには、処理水というくくりはない。安全な水。世界でもトップレベルの安全な水。

「東北に旅行に行く?」

「行こう!」

「もちろん!」

きつと、この会話が正しいのだろう。また、日本全国の様々な被災地の一日も早い復興を願う。島国、日本。そして、水は循環する。

入選

水と人と食物

静岡県 不二聖心女子学院中学校 一年 名倉 和紗

五月の田んぼの水面には、山の線やみかんの木の影、夕焼けが映っている。これからいねへと成長する苗を、誰かが植えている光景が目にかぶである。まさに田植えの時期だ。秋が来れば、黄金色に輝く、立派ないねが風にゆれる。私たちが毎日当たり前のように食べている、お米。このお米は水がなければ育つことはない。

私の祖父の家には田んぼがある。私はそこで、毎年田植えをしている。とはいっても、ほとんど祖父が機械で植えた田んぼのはじっこに数本の苗を植えるだけの、すぐに終わる田植えだ。こんな簡単な田植えだが、くつ下をはいて泥んこの田んぼに入り苗を植えるため、泥からなかなか足がぬけない。時間が経つと、くつ下に泥が入り重くなる。足をぬき、前に進むうとすると、何度も転びそうになり、手に泥がつき、挙句の果てには手も足も泥まみれになる。

田んぼにはアメンボやオタマジャクシなどの虫がうじゃうじゃいる。私は虫が苦手だ。しかしこの虫たちは、いねの成長をじゃまする害虫を退治してくれる。そしてこれらは水がなければ生きていくことができない。田んぼと、その場所で生きる虫と水。この三つはどれか一つでも欠けるとお米が育たなくなってしまうのだ。

泥まみれになった私の手足を洗う場所は、田んぼのあぜ沿いに流れる水路だ。その水路の水は、泥のなまあたたい田んぼの中とは異なり、ひんやりとしている。この水が私たちがふ段食べているお米を育ててくれているのだ。これは農業用水といい、水道水とはちがいで、農作物を育てるためのお水だ。この水路の水は、いったいどこから来ているのだろうか。

水は、川やダムから来ている。先人たちが、川やダムから引いた水が、地域全体の用水路に流れる。そして、その用水路からさらに引いた水が、祖父の田んぼの水路など、地域の農作物を育てている畑や田んぼにた

どり着くのだと親から聞いた。地域全体で使われている用水路は、先人のたくさんの方々の努力のおかげでいま、こうして農作物を作ることができているのだ。そしてこの用水路に流れる水も、自然のめぐみそのものだ。この水がなければ祖父の地域の農作物は育つことはない。この用水路は、先人たちの思いを受けつぎ、今も地域の人によって守られている。

また、祖父の家にはみかんの木も植えられている。みかんは、お米ほど多くの水を使わなくても育つ。しかし、あまりにもかわいてしまうと、農業用水をかけて育たせると父が教えてくれた。ここでも、水は活やくしているのだ。水はたくさんの中で、農作物や人を支えている。

私たちは、当たり前のようにお米などの食べ物を食べて育ち、生きている。そのお米のいねも、同じ地で育っているみかんも、すべて水があるから育ち、私たちがそれらを食することができているのだ。水がなければ、お米は育たず、私たちが食することもできない。それぐらい水は人間と、そして食べ物と密接な関係なのだ。この関係をこわしてしまふことになれば、人は、そして生き物は、生きることができなくなってしまう。来年も、その先もずっと、この田んぼの水面に映る自然を見たいし、守り続けたいのだ。そのためには水は必要なのである。

入選

恵みの雨

静岡県 浜松市立笠井中学校 二年 二村 陽日

日本には、春雨、時雨、梅雨、零雨など雨の付く言葉がたくさんあります。中でも「恵みの雨」という言葉をよく聞くのではないのでしょうか。

私は、恵みの雨という言葉聞いて、少し不思議に思いました。なぜなら、この言葉からは、雨は恵みであり大切にすべきだということが伝わってくるからです。雨と聞いて大喜びする人はあまり多くはないのではないのでしょうか。私も、雨の日は嫌いです。雨が降ると、外がどんよりして気分が落ちます。雨が降ると、傘をささなくてはいけなくなりません。雨が降ると、出かけるのが嫌になります。しかし、恵みの雨という言葉からは、雨を非常に大切にしていることが伝わってきます。

なぜ、ほとんどの人が嫌いだるう雨を、「恵み」と表現しているのでしょうか。少し考えてみたとき、ふと思いついたことがあります。

私のおばあちゃんは、家から少し離れたところで畑をやっています。ある時、私も気分転換におばあちゃんの畑についていったことがあります。その時、畑の隅に大きなドラム缶のようなものがあり、なんだろうと思って中を覗いたら、ドラム缶の中には大量の水が溜まっています。何に使うんだろうなあとと思って様子を見ていたら、おばあちゃんが畑仲間「この水使ってもいいですか？」と聞いていました。なぜそんなことを聞くのだろうと思うて何に使っているの？と質問してみたら、雨水をためておいて、畑に水をやるときに使うんだよ。と教えてくれました。それを聞いて私は、感心しました。今まで嫌でしかなかった雨も、人のために利用することができるということが分かったからです。よく思い返してみれば、普段生活している中でも「雨が降って畑が潤った」「雨が降ってくれてよかった」などというのを聞く機会はあります。私にとっては嫌で仕方のない雨でも、畑をやっている人たちにとっては「恵みの雨」であるということが分かり、雨の見方が少し変わりました。

今、能登半島では、十分な水を得ることができないと聞きます。飲み

水や、洗顔用の水などは清潔な水でなくてはいけないかもしれません。しかし、トイレの水や、地震で汚れてしまった家具などを洗浄する水はどうでしょうか。必ずしも清潔な水でないといけないのでしょうか。トイレの水や、洗浄用の水は、雨水で代用することはできないのでしょうか。

清潔な水は、水道からしか出ないです。水を沸騰させるにも、電気やガスが必要です。しかし「雨」は自然のもので、雨ならば、電気もガスも必要ありません。雨を利用できれば心強いのではないのでしょうか。雨水を維持することは大変かもしれませんが。放っておいたら腐ってしまうり、ボウフラが湧いたりしてしまうでしょう。それでも、何かいい案はないのでしょうか。

東京にある両国国技館では、トイレの水に雨水を利用しています。昭和五六年頃、墨田区の錦糸町や両国地区などでは、都市型洪水に度々悩まされていたそうです。当時、台東区にあった蔵前国技館が墨田区に移ることになり、区は日本相撲協会に洪水防止と水資源の有効活用のために国技館への雨水利用の導入を申し入れ、今では国技館のトイレの流し水や冷却塔の補給水等に、ためた雨水を活用しています。

このように、ほとんどの人が嫌っている雨でも、使い方によっては人々の生活を豊かにすることもあるのです。私も、雨は嫌だからといって遠ざけるのではなく、「雨」という貴重な水を大切にしていきたいと思えました。と同時に、普段から、手を洗っているときは水を止める、洗顔や歯みがきをするときに水を出しっ放しにしないなど、もっと節水を心掛けようと思えました。

入選

エメラルドグリーンに魅せられて

静岡県

常葉大学附属

常葉中学校

二年

西ヶ谷

あかり

大井川に沿って緑豊かな道を進むと、見えてくる巨大な施設、それは長島ダムです。上から見ると、まるで絵の具を溶かしたような、エメラルドグリーン湖面が広がります。ダム湖の前に私は最初、素直に美しいとは思いませんでした。この下に故郷を失った人たちの生活があったのだろう、もっと豊かな自然があったのでは、と想像すると、湖面の色がまるでそれらを隠しているように思えたのです。

この巨大なコンクリート施設は必要だったのでしょうか。ダムができるまでの歴史を知ると、自然の脅威と向き合った人々の暮らしが見えてきました。長島ダムの周辺地域は全国的にも降水量が多く、かつて大雨が降ると洪水が発生し、水に浸かってしまう家や建物が多く、たくさん被害がもたらされてきました。安全な暮らしができるように大雨の際に水を貯めることのできるダム湖。ダムがあるおかげで、大雨が降っても、川に水が溢れることを防ぎ、被害を少なくすることができます。役割はそれだけではありません。雨が降らない季節にはダム湖から水を流し生き物を守る、水道水への供給、かんがい用水、そして工業用水。安全で豊かな暮らしのために安定した水の供給をする様々な役割を果たしていました。江戸時代に、「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」と歌われた大井川の水量が人工的に管理されているなんて、とても不思議な気持ちになりました。

私が出会ったのはダム施設だけではありません。台風の前に私がインスタント食品や水を備蓄している時に、夜も眠らずスクリーンで河川の様子を見て、雨の量、河川の情報を集め、ダムからの放流を判断する人。常に川を見守り、放流の際には下流まで危険を知らせに行く人たち。また、永続的にダム湖が使えるようにするために、上流からの土砂や流木を撤去する人たち、保全管理をする人たちです。私たちの安全な暮らしのその先には、美しい自然と人々の命を守る、そして百年後もダムが使

えるようにと働く大人たちの存在がありました。

それに比べて私たちの生活はどうでしょうか。夏になると河原でバーベキューやキャンプ、花火を楽しみむ人がたくさんいます。私たちは川を、自然を大切にできているでしょうか。私はこのことを友達にも知らせたくて、掲示物を作って、夏休み明けに学校で発表をさせてもらいました。一人でも多くの人にダム湖そしてダム湖に関わる人たちについて知って欲しいと思ったのです。

ダム湖の必要性に気づいた私に衝撃的なニュースが飛び込んできました。それはテレビのニュースで流れる、リビアのダムが決壊した映像でした。街中を土砂が埋め尽くし壊滅的な被害を受けていました。この悲しい災害は、単に暴風雨による降水量が多かっただけでなく、戦争や政治的分裂が続くダムの管理や修復がなされていなかったことが要因の一つだということを知りました。家や家族を失った人たちの様子が映し出されると悲しみと同時に私は悔しさが込み上げてきました。

私たち子どもができることは何でしょうか。私は「正しい知識を身につけること」だと思いました。私にダム湖の建設はできないけれど、自分の住む地域について調べることができます。自分たちの暮らしに危険なことがあったら、声を上げ、その小さな声が集まれば、私たちの安全な未来、美しい自然を守り共存していく未来を作り出すことができます。と思います。

エメラルドグリーンに輝きながら穏やかに私たちの暮らしを守ってくれるダム湖のように、私も様々なことに興味を持って、知識を深く蓄積したいです。そして私の大切な人や自然を守っていただける大人になりたいです。

入選

私の来世

京都府 京都先端科学大学附属中学校 二年 徳田 葵

私の来世は水がいい。そう思い始めたのは最近のことだ。私は、水は何にも縛られないと思っている。どんな形にもなれるし、どんなところにも行ける。海の水はいろんな生き物に出会える。農業用水は植物の中に入ることが出来る。そんな自由な水に、私はなりたい。

でも、今世界では水に関する様々な問題が起こっている。例えば、衛生設備が不十分な事により、水質汚染が起きている。私は正直汚染されたような嫌われ者の水にはなりたくはない。もし私が汚染された水になり、感染症の菌などを人間にうつしてしまったら、罪悪感に苛まれるだろう。

その他にも、世界的に水の使用量が増えている現状がある。もし私が水になり、水道から出てきたとする。それなのに、出しっぱなしにしていた水道だった為に、どこにも行けずに下水道行きになっちゃったら、悲しくて仕方がない。

そして、私が一番深刻だと思っている問題は、水による紛争だ。水の所有権や配分を争って紛争に発展する国も珍しくない。もし私が水になって、自分を奪い合うがために人の命が失われるなんてことになったら、大きな喪失感に覆われることだろう。

私は小さい頃、「水は色々な場所を旅して、同じところに帰って来る」という話を聞いたことがある。もしその話が本当なら、私の来世が水であった場合、このような問題に直面することになる。汚染された水になり、水道から出てきてもすぐに下水道に流れ、自分を奪い合った人が亡くなる来世は、流石に勘弁してほしい。だから私は、現世でこの問題を解決してから来世を迎えたい。そのために何が出来るか考えてみる。

私がまず思いついたのは募金だ。ありきたりだが、手っ取り早く支援することが出来るのは間違いなく募金であると思っている。今は、ユニセフやワールド・ビジョン・ジャパンなど、信頼できる団体が数多く存

在し、子どもの私でも行動にうつしやすい支援方法だと思う。

そして、自分たちで節水することも大切だと思う。節水すれば世のためになるのはもちろん、お金の節約にもなり、まさに一石二鳥だ。この作文を書くにあたって、私も少しだが取り組んでみた。もちろん、すぐに目に見えた効果がでることはなかったが、なんとなく世の中に貢献しているような気持ちになり、凄くいい気分だった。これからも続けていこうと思う。

しかし、水の問題は世界に蔓延していて、ここであげた解決策だけで解決するとは私も全く思っていないし、思えない。私はまだ子供である。そのため、募金の金額にも限界がある。現地に行つて支援することもまだできない。水の問題を解決しようとしている団体に所属することもまだ難しい。しかし、出来ることもあると思う。

バタフライエフェクトという言葉をご存知だろうか。この言葉は「非常に小さな出来事が最終的に予想もしていなかったような大きな出来事につながる」という状態を表したものである。もし私の作文によって募金活動をする方が増え、どこか遠い場所で救われた人がいたとしたら、もし私の作文によって節水をする人が増え、必要な人のところへ届くようになったとしたら。

一つ一つは小さな行動かもしれない。意味があるのか疑いそうになつてしまいかもしれない。だが、その行動の輪が広がって、大きな問題が解決したとしたら。そんな来世のために、私は行動し続けようと思う。

入選

籍水利資人工（すいりをかりてじんこうをたすく）

京都府 京都先端科学大学附属中学校 三年 江部 花音

「今、琵琶湖の水位下がりがりまくってんの知ってる？このままではほんまに琵琶湖の水止められてまうで！」理科の授業中に先生が放った衝撃の一言。一体どういうことだろうと半信半疑で「琵琶湖 水位」と検索すると信じられない光景が表示された。琵琶湖の水位は基準値よりも七十センチ近くも低下。明智光秀の廃城、坂本城の石垣が地上に姿を表しモンサンミッシェルの様だと話題になっている。夏以降の降水量が著しく少なかったのが原因とのことだった。十四年間生きてきて、ここまで生活用水について心配したのは今日がはじめてである。私は、普段何げなく使用している琵琶湖の水がどれほど貴重なものなのかを再確認すべく、琵琶湖疏水記念館に赴くことにした。

疏水記念館は小学校の時から訪問である。当時私は疏水についてあまり関心が持てなかったのだが中学生となった今行ってみると想像していたよりもはるかにスケールの大きな話に驚愕し、疏水について意欲的に知ろうとしなかった自分を強烈に恥じた。琵琶湖疏水ができたのは明治時代。京都が日本の首都ではなくなるところから物語は動き出す。当時の京都府知事、北垣国道は何としてでも京都にもとの活気を取り戻したいと考え、疏水の開発に至った。疏水工事の責任者は当時まだ二十三歳の田邊朔朗である。まだ大学を卒業したばかりの若者がかつての都の行末を背負っていたなど現在では考えられない。彼は東京大学工学部で英語のみでの授業を受け海外の新しい技術を進んで取り入れた。堅坑工事はまさにその代表例である。長等山の上から四十七メートルもの堅坑を掘り、そこから横に掘り進めることでトンネルを作る。この堅坑工事は日本で初めてであり、またここで作った第一トンネルは当時日本最長のトンネルであった。さらに日本

人のみで行う最初の事業でもあったという「日本一づくし」。だがその建設は困難を極めた。当然だが堅坑の中は薄暗く作業は全て手作業である。途中で地下水が溢れ出してしまうこともあったそうだ。そのような状況下でも京都の未来を夢見て工事を続けた人々を思うと涙が溢れそうになる。また田邊も米国に視察に行ったり自ら土木工学についての授業を行ったりしたという。こうして四年七カ月に及ぶ工事の末、第一疏水が完成した。その後、水力発電所と第二疏水も完成し、日本初の電車運行、電灯、紡績、伸銅など新たな産業に活用された。琵琶湖疏水には建設に関わった人物や政府の有力者たちによる扁額が掲げられている。その中で田邊はこんな言葉を残している。「籍水利資人工」自然の水の力を、人の仕事に役立てるという意味である。当たり前のように水道を捻ると出てくる琵琶湖の水。しかしそれは信じられない程多くの人々の力の賜物である。だがその根底にあるのは、母なる湖こと琵琶湖の存在であることを忘れてはならない。我々は自然の中の水を「お借りして」いるのである。漢字六文字で水の尊さを簡潔に訴えた素晴らしい文章だと感じた。気付くと展示物を前に大きく頷いていた。

後日、滋賀県まで父とドライブに行った。小さい頃から慣れ親しんできた琵琶湖は、記憶の中にある姿と同じである。大雨が降った影響で少し水位が回復したのだという。少し野性的な、しかし母性も感じるような力強い波。青々と日の光に照らされたその姿はどこからどう見ても自然の産物である。「籍水利資人工」疏水記念館で見た言葉が頭をよぎる。そして私は母なる湖に向かって宣言した。「京都まで来はったら、大切に、誇りを持って役立てて頂きます。」

入選

水問題を解決するアプリ

大阪府 大阪府立水都国際中学校 一年 岡野 朱里

みなさんは、自分が一日にどれぐらいの水を使っているか知っていますか。私たち人間は、生活の中で様々な場面で水を使っています。お風呂やトイレで使ったり、洗顔や歯みがきの時に使ったり、のどがかわいた時に飲んだりするなど、数え切れないほどの回数水を使っています。そこで私は、自分が一日にどれだけの水を使っているのか知りたくなり、

実際に一日で使った水の量を測ってみました。私は、あまりたくさん水を使っているという認識がなかったので、大体六十リットルぐらいだと予想しました。しかし結果は、三百三リットルもの水を一日で使っていました。その上、この中には、料理や洗たくに使った水はふくんでいません。つまり、入浴やトイレ、洗顔、歯みがきの時に使った水とのがかわいた時に飲んだ水だけで、二リットルのペットボトルを百五十本以上使ってしまったということになります。私は自分が快適な生活をするために、一日にこれだけ多くの水を使っているということが分かってとてもおどろきました。そして、一日をふり返ってみると、もう少し使う水を減らしても、十分快適な生活ができると考えました。

現在日本は、水道水をそのまま飲むことができる数少ない国の一つです。日本では安全な水が身近にあるため、水問題についてあまりよく知らなかったり、興味を持っていないかったりすると思います。世界には、安全な水を飲むことが出来ず、毒が入っていると分かっている水を飲んだり、一日に使うことができる水の量が決められている国や地域がたくさんあります。体に害のある水でも生きるためには飲まなければならぬという人々がいます。しかし、少しでも多く生きるためにと思って飲んだ水のせいで、病気になったり、亡くなったりしてしまう人が大勢います。自由に水を使えないせいで、不自由で衛生的にもあまり良くない生活を送っている人もたくさんいます。私はこのような水問題で困っている人々の力になりたいと強く思いました。

しかし、このような水問題は、たくさんの人に節水を呼びかけて、水の使用量を減らすという方法では何の解決にもつながらないと思います。なぜなら、日本で節約した分の水が水問題で困っている国や地域に届くわけではないからです。

そこで私は、水問題の解決に向けたチャリティアプリを作ると良いと思います。アプリではまず、人々にクイズを通して楽しく水問題についてくわしくなったり、興味を持ってもらいます。そして次に、クイズに正解すると獲得できるポイントに参加者が貯めていきます。最後に、参加者が貯めたポイントをお金に変えて、水問題に困っている国の安全な水をつくる設備の工事や井戸を掘るために使うお金として、寄ふをします。寄ふをするお金は、アプリに広告を付けて広告費から寄ふをしたり、水問題の解決に賛同してくれる会社にスポンサーとして付けてもらい、寄ふのお金を出してもらったりすると良いと思います。このアプリを通しての寄ふが広まっていけば、水問題に貢献する人が増えるはずですが、また、アプリに募金が出来ると機能が付けることで、積極的に募金をする人も出てきて、寄ふできる額が増えると思います。さらに、募金を一定の額以上してくれた人には、特別なリターンをつけることで、募金をする人が増えていくと思います。

水問題の解決に必要なのは、人々の水問題に対する意識だと思っています。このチャリティアプリを通して水問題の現状を世の中に広め、「自分が水問題に貢献している。」という充実感を使っている人に感じてほしいです。このような取り組みをすることで、少しでも世界の水問題を解決に近づけていきたいです。

入選

水質と生き物と私たち

大阪府 大阪府立水都国際中学校 二年 須摩淵 心

水をきれいにすればするほど、環境はよくなる。私はずっとそう思っていた。しかし、水をきれいにしたからといって、生き物が住みやすくなるとは限らない。

イカナゴは兵庫県の名産品だ。私の母は兵庫県出身で、祖母がよく手作りのイカナゴの釘煮を送ってくれる。毎年届くダンボールの中、瓶に詰められたイカナゴが、春が来たのだと知らせてくれる。今年の春も祖母からダンボールが届くことをとても楽しみにしていた。しかし、今年のイカナゴの水揚量は記録的に少なく、一日で漁を打ち切ることになってしまった。楽しみにしていたイカナゴを今年は食べられないと思うと寂しい気持ちになった。

なぜ、イカナゴが減ってしまったのだろうか。そう思った私はイカナゴの不漁の原因について調べてみた。すると、イカナゴの数には水質が関係しているということがわかった。

イカナゴがよく取れる播磨灘や大阪湾では、高度経済成長長期に工場や家庭からの排水で水質が悪化し、プランクトンが大量発生していた。この問題を解決するために、一九七三年に瀬戸内法を制定し、窒素やリンを含む工場排水が規制された。このことにより、水質は大幅に改善され、赤潮の頻度も減った。

しかし、近年は水質の改善の行き過ぎが問題視されている。イカナゴの不漁の原因も水質の改善の行き過ぎだ。窒素やリンが増えすぎると水質汚染の原因になってしまいが、一方で減らしすぎるとプランクトンの餌がなくなる原因になってしまう。水質改善が進み、窒素やリンといった栄養塩が減ったことで、イカナゴの餌となるプランクトンが不足し、餌を十分に食べていないイカナゴが増えているのだ。さらに、プランクトンの不足はイカナゴの卵の数にも影響を及ぼしている。メス一匹当たりの卵の数は約三十年で約三割少なくなったことがわかっている。

水質を改善することはもちろん必要だが、私たちは水をきれいにすることだけに意識を向け過ぎていてのではないだろうか。私は、人間によって汚染された水を「きれいにする」のではなく、「元の状態に戻す」ということが大切だと思う。なぜなら、私たちが生き物と共存していくためには、水をただきれいにするのではなく、生き物が住みやすい環境を作っていくことが必要になるからだ。生き生きと暮らしていた生き物たちの環境を排水によって破壊し、水が汚くなったからといって水質改善を進めすぎ、結局は生物の命を奪ってしまっている。水に対して人間の住みやすさのみを求めるのではなく、生物のために、私たちが壊してしまった環境を私たちが取り戻していかなければならないと思う。

ただの中学生一人が水質を管理したり、生き物を保護したりすることはできない。しかし、生き物にとってどれだけ水が重要なかを伝えることはできる。私はイカナゴの不漁の原因を知るまで、生き物と水質が深く関係していることを知らなかった。以前の私のように、水質が生き物の命を左右しているのだと知らずに過ごしている人はたくさんいると思う。だから、水質と生き物の関わりについて少しでも興味を持ってくれる人が増えてほしい。水質と生き物の関係について知ってもらうことで、行動は起こせなくても水に対しての意識や見方は変わらと思う。この作文を読むことで、一人でも多くの人に「水って大切なものなんだな」と改めて実感してほしい。そして、水と人間を含む生き物はお互いに支え合っているということを忘れずに過ごしていきたい。

入選

「水の都」を未来に残すために

大阪府 大阪府立水都国際中学校 一年 内海 はなえ

私の小学校最後の春休みを利用して、家族で沖縄旅行へ行きました。沖縄は、大阪に比べて海がとてもきれいです。特に、ホテルの近くのビーチは見たことのないほど美しく、魚と触れ合ったり、貝殻を拾ったり、一瞬で心を奪われました。

一方で、不安を感じる出来事もありました。美しいビーチにも、ペットボトルの破片やビニール袋などのごみが打ち上げられていたことと、台湾の地震の影響で沖縄県に津波警報が発令されたことです。海の自然の恵みを身近に感じられるというプラスの面は、私たち人間がそれを奪ってしまうかもしれないという不安や、大きな自然の驚異にさらされるというマイナスの面と、すぐ隣り合わせなのだと感じました。

この沖縄での経験をきっかけに、私が暮らしている大阪の水についても興味を持ち、調べてみることにしました。

大阪は、四百年ほど前の江戸時代から「水の都」と呼ばれ、府の面積のおよそ一割を河川が占めています。川や水路が多いおかげで、大阪には日本各地から品物が届き、都市として発展していきました。私の自宅のすぐ近くにも東横堀川が流れていて、タグボートが通過する様子を見ることがができます。また、社会実験プロジェクト「東横堀川ING」が季節ごとに開催されていて、父と妹は昨年のリバークルーズに参加しました。

しかし、大阪ではどの川へ行っても少し臭いが気になり、ゴミが浮いていたり水がにごっていたりするなど、「きれいだ」と感じたことは残念ながらありません。実際に二〇〇八年まで「日本一汚い川」と呼ばれていたという大和川では、小学校のプールおよそ二杯分の生活ごみが回収されたこともあったそうです。

どうすれば、大阪の川や海が、沖縄の海と同じように「きれいだ」「美しい」と感じられる姿に変わることができるのか。「水の都」の未来に

いて、中学生の私が今取り組めることは何かを考えました。

昨年、私は大阪公立大学で行われた「アップサイクル ワークショップ」に参加しました。海洋プラスチックごみとして回収されたペットボトルキャップで、ハンドメイドアクセサリーを作る企画の中で大学生や水都国際高等学校の先輩からマイクロプラスチックの問題や海洋生物への影響について、スライドを交えながら解説してもらいました。

私も身近なところでは、ごみのポイ捨ては絶対にしてはいけないこと、レジ袋を利用せずエコバッグを持参することを家族と一緒に徹底しています。

また、最近SDGsへの関心が一層高まり、河川や海の清掃や川岸の植林活動など、自然の水質や環境を守る活動が増えているそうです。ワークショップでサポートしてくれた高校生達は「スポGOMI甲子園・大阪府大会」に参加・優勝したことを知り、少し年上の先輩が問題意識を持ち、学校の外で活躍をしていることにとっても驚きました。

地球温暖化や海洋プラスチック問題などの環境問題や社会問題に興味を持っている私が、生まれ育った大阪「水の都」と同じ名前のついた水都国際中学校に入学できたことは、大きなチャンスだととらえています。水都アクションプロジェクトやGAPSの活動を通して、少しでも美しい「水の都」を未来に残すため、学校や地域の中で仲間と共に自分ができることを探し、積極的に取り組んでいくことを、私の中学校生活の目標のひとつにします。

入選

織物の町と呼ばれる所以

兵庫県 兵庫教育大学附属中学校 三年 片岡 咲萌

私のお父さんとお母さんは小さい頃、西脇市に住んでいました。西脇市は、織物の町として播州織を生産しており、兵庫県を代表する織物として全国でも広く知られてきました。そのことを美術の授業で改めて知った私は、播州織について調べてみることにしました。調べてみると、播州織は、千七百九十年代の終わりから、現在まで、二百年以上の長い歴史を持っていることがわかりました。また、「先染め」と呼ばれる、糸を染めてから織る綿織物のことで、織ってから染める「後染め」というものに比べると糸の中までしつかりと染色されるため、色落ちがしにくく、また、何色もの糸を織り重ねることができて、繊細な模様や色合いにすることができそうです。

織物について調べてみると、文明が川の近くで発展したように、織物もきれいな川の近くで発展し、水質は軟水が良いとされていることを知りました。染色には、水の「硬度」というものが影響すると言われており、鉄分やカルシウムなどのミネラル成分を含む「硬水」を使うと発色が良くなかったり、生地を硬くしてしまう要因になってしまいうこともあるため、ミネラル成分の少ない「軟水」が良いとされているということが分かりました。

このことを知り、私はなぜ、西脇市が織物の町と呼ばれるほど、織物が盛んになったのか、すぐに理解できました。西脇市がある北播磨地域には、加古川・杉原川・野間川などの川があります。これらの川の水質が染色に最も適した軟水だったため、播州織という織物が出来、美しい文化が生まれました。そんな素晴らしい文化、産業ができたのは西脇市に自然の豊かさがあつたこと、そして、播州織染色工場、多可染工のホームページ、染色工場についてという項目で、「自然環境がたっぷり残っている風光明媚な当地で操業しているため、このきれいな自然環境を壊すことなく操業を行っていききたい」と書かれていること、そして、他にも、

排水処理でも「自社処理場にて、沈殿処理とバイオ処理、PH調整をして、放流しており、排水は二十四時間自動測定機により監視を行っている」と書かれていることから分かるように、播州織を作っている企業の自然への配慮、思いやりなどがあつたからこそだと思います。このような行動により、自然が美しいままということだけではなく、自然、川の水がずっときれいなことによつて、より良質な織物ができていきました。

このように、地域の自然のこと、地域の文化、産業のことを考えて行動してくれた人たちがいたからこそ、この土地の水の環境を守りつつ、播州織の技術の伝承がここまで続けられてきたのだと思います。そして、これらのことから、地域の産業をより活性化していくには、もちろん、技術も必要ですが、自然の力、水の力も必要だということを学びました。これまで私たちの町の自然と文化、産業を守ってきたくれた方々のバトンをしっかりと受け取り、私たちの世代で自然を壊さないように、そして、これからも私たちにとつて大切な川、大切な文化、産業を私たちの世代でも守り抜き、次の世代にきれいな川と美しい文化を繋げていきたいと思えます。

入選

僕の大好きな水辺の町

和歌山県 田辺市立大塔中学校 二年 田中 伸乃丞

突然ですが、みなさんの周りに水辺はありますか？僕の周りには、水辺が多くあります。中学校の前の河川敷には、水辺の楽校という公園があります。

僕は、何よりも、どんな場所よりも、この水辺が大好きです。川のせせらぎ、木々の揺れる音、沈む夕日、夏に泳ぐ川そのすべてが「好き」です。

僕は、小さい頃からこの水辺の近くで過ごしてきました。いろんな虫を捕まえたり、おたまじゃくしを見つけて、育てたりするのが好きでした。でもなぜか最近までは、身近にあるこの水辺自体に特別な思いはありませんでした。身近だったということが大きいかもしれません。そんな僕に転機といえるかどうかは分かりませんが、その素晴らしさに気づく機会が訪れたのは、小学校最大のイベントの修学旅行で他府県に行った時です。ふと一息ついたとき、きれいな川、いつもの風景が見たいと思いました。僕は、この時初めて地域の水辺の素晴らしさに気づきました。

水辺の素晴らしさに気づいた時から、いくつも良いことがあります。それをいくつか紹介していきたいと思います。

一つ目は、今までは、見ようとしなかった季節の変化に気づけたことです。春は桜、夏は、セミの鳴き声、川の流れる音、秋は紅葉やすき、冬は、滅多に降らない雪に染まる木々、季節の移り変わりが楽しみでそれを両親に、

「桜が咲いたよ。」

「もうせみが泣き始めたよ。」

などというのがとても楽しみです。そんな季節の移り変わりを見ている日々の生活の中でちよつと落ち込んだ時、水辺の風景を見ると明日ももう少し頑張ってみようという気持ちになります。

二つ目は身近にある美しさを友達と一緒に感動し合えたことです。小学六年生の頃友達と一緒に「いつもの場所のさらに上流に行ってみよう」と二人で出かけました。そこで僕達が目にしたのは、岩々の間

を激しく流れる水。あの光景は、今でも鮮明に覚えています。自分の足で辿り着いたあの景色は絶景でした。自分の足でなにかを見つけた素晴らしさに気づきました。その友達とは、今でも時々一緒に川の流れや、そのきらめきを見て、

「きれいだね。」

などとお互いに思わずつぶやき合っています。

三つ目は、友達といくつもの思い出をつくってこれたことです。その一つとして挙げられるのが、昨年、毎日毎日川に行ったことです。それは、僕にとっては毎日が宝物でした。肌に触れる水感覚。それは今でも鮮明に覚えています。みんながナマズを見たことは今でも話題の中心に上ります。僕を含め友達は初めて見るナマズに大興奮でした。

「実際にいたんだ。」

と、友達は驚きの声を上げていました。それは今でも忘れられない思い出となっています。

近年、環境破壊が問題になっていますが、こんなにも人にとって憩いの場、思い出の場となるこの水辺を僕は後世に残していきたいです。いつか自分が大人になったとき子どもと一緒に水辺の公園を散歩し、川を泳ぎたい、そんな夢が最近僕の中にはあります。

この水辺を守るために、自分たちの中学校では、水辺の楽校プロジェクトという取り組みを行っています。この水辺の公園をさらに活用し、保全していくための取り組みを中学生で考えています。昨年度は、大塔行政局でプレゼンテーションを行い、ごみ拾いや、メダカの保護に取り組み計画を提案しました。本年度より実行していく予定です。大好きな水辺の公園の保全に関わっていきけることをとても嬉しく思っています。また、自分自身、普段から帰り道でゴミを見つけたら拾うなどして、環境美化に努めていきたいと考えています。

みなさんも近くの水辺に目を向けてください。きっと、その素晴らしさに気づけるはずです。

入選

水と共に生きるために

鳥取県 鳥取市立桜ヶ丘中学校 二年 高橋 彩夏

朝起きてまず顔を洗う。トイレに行き、用を足して水を流し手を洗う。朝食は母が作ってくれたサラダやみそ汁にご飯。おいしく頂き、歯磨きをして口をゆすぎ、身支度を整えて登校する。何気ない日常、毎朝のルーティーンを振り返ると私たちの生活には水が必要不可欠だ。しかし当たり前前の様に蛇口をひねればおいしい水が出てくる事に、感謝することはなかなかない。

昨夏、家の台所の修繕が行われた。工事の関係で数時間ではあるが水道が止められ、水が使えなくなつた。トイレに行き水を流す。

「あれ？普段は水がタンクに溜まっていく音がするのに：あ、そうだった。水使えないんだった」

業者さんにつきさつき断水の事を伝えられたばかりなのに、全く頭に残っていなかった。それほど水が使える事を当然だとして普段通りしてしまっているのだと実感した。母が洗面所のシンクに洗面器を置き、手洗い用の水を溜めておいてくれていた。貴重な水をほんの少し手にかけて手洗いをする。その時、テレビで見たアフリカの農村地帯の生活の様子が、脳裏に浮かんだ。子供たちが数キロの悪路を湖まで毎日水を汲みに行く。決してきれいとは言えない少し濁つたその水は、料理、洗濯、飲み水、全ての生活用水となっており、それが日常だった。彼らの生活の様子を画面越しで見た私は、その水を口にできるだろうか：手を洗うことすらはばかられるのではないかと思つた。今、目の前にある洗面器の中のきれいな水、なんてすごいことなんだろう、私は遅ればせながら断水のおかげでそう実感できた。

近年、大雨や大雪による災害が毎年のように全国で発生する。その度に停電や断水が起こり、生活は一変する。悲惨な現場をニュースや新聞で目にする度に、いっどこで起きてもおかしくない事に恐怖を感じる。雨は私達の生活を支えてくれる水となるのに、脅かす存在にもなつてし

まっている。便利な生活はどんどんと温室効果ガスを発生させ、地球温暖化に拍車をかけ、異常気象の原因となつてしまう。

これを止めるために自分出来ることを調べてみると、節電、徒歩や自転車を使う、マイバックを持参する、等と並んで水を出しっぱなしにしない事や、不必要に給湯の温度を上げていないか等が挙げられていた。水を水源からひいてくる、浄水場できれいにし、水をお湯にするにも全てエネルギーが必要であるとも述べられていた。そういえば、お風呂で気持ちいいからとシャワーをしっかりと浴びていたことを思い出した。

これは見直さなければならぬ私の生活習慣だった。両親に調べた記事を見せて、さっそく節水できるシャワーヘッドに替えてもらい、入浴時間や水の使い方家族で見直すことにした。姉妹でなるべく一緒に入り、給湯器を使う時間を短縮すること、家族で合間を開けずに入浴してお湯を冷まさないようにすることなど、今まで気にしていなかったことを少し工夫すると、水道と給湯器の燃料の使用量は減り、入浴時間が短縮されたことで、家族団らんの時間は増えた。

現在、世界では22億人もの人達が管理された水を使用できずにいる。この問題を解決するには私達一人一人が自分の事としてこの問題を考え、日常生活を見つめ直す必要があると私は思う。小さな事ではあるが、コツコツと続ける事で、この自然豊かな地球で暮らしていける事を願う。

入選

水について考える

香川県

さぬき市立さぬき南中学校

二年

西尾

葉奈

私の父は農業をしています。香川県さぬき市大川町の南川という地域で、その中でも山奥の方、山の高いところにある田畑で作物を作っています。そこはもとも父の祖父の畑でした。私にとってはそう祖父母になります。そう祖父は私が生まれる前に亡くなってしまったので、会ったことがありません。私が覚えてるのは、そう祖母と祖母、大おじさんと父が段々畑でお米を作ったり、自然薯を作ったりしている姿です。そう祖母も昨年亡くなってしまったので、今は父が主となって、お米や自然薯、きゅうりを作っています。

お米もきゅうりも、おいしく作るためには、きれいな水がたくさん必要です。でも、香川県という雨の少ない県の、さらに山奥の高地の田畑で、父は水の確保に毎年とても苦労しています。昔はため池があったのですが、過疎化が進み、周りの田畑を作る人がいなくなってしまうため、池が壊れていたり、水を流すための溝が途中で壊れていたりして、ため池の水が使えないそうです。そのため、普段は小川から水を引いて使っています。でも雨が降らず水不足になると、小川の水が足りなくなってしまう。そんな時は、もっと遠くの川からパイプを通して水を運んでいます。

私たちは普段、水を使うためには水道の蛇口をひねるだけです。シャワーを浴びる時、食事を作る時、水が飲みたい時など、当たり前のように水を使うことができます。でも、調べてみると、世界では水を使えることは当たり前ではなく、二十二億人、つまり世界の十人に三人が安全に管理された水を使用できずにいるそうです。このうち十人に一人にあたる、七億八千五百万人は基本的な水サービスを受けることができません。そして、一億四千四百万人は、湖や河川、水路などの未処理の地表水を使用しています。安全に管理されていない水は、動物のふん尿やウイルス、菌が混じっているため、そのまま飲んでしまうと病気や下痢症

を引き起こし、亡くなってしまう場合もあるそうです。清潔な飲み水を手に入れることすらできず、多くの人々が日々水不足に苦しんでいるのです。一方で地球温暖化や異常気象による渇水が起こったり、大雨や洪水で被害にあうなどの自然災害も増えたりして、事態はとても深刻なのだと思います。

私たちは、日常生活の中で水に対して無意識に使いがちです。私自身も、学校や家で水を無駄に使ってしまうことがあります。そして、そのことに気付かずに過ごしてしまっていました。この夏、香川県はもう暑続きで、お盆ごろに台風が近づくまでは雨が降らなかったため、父の田畑は水不足となりました。父が暑い中、必死にパイプをつなぎ、何度も水の出方を確認している姿を見て、水は当たり前にもあるものではなく、とても貴重なものだ、そして生きるためになくしてはならない大切なものだと、ハッとしました。いつでも水を使えることに感謝しつつ、無駄な使用を減らすように心がけようと思うようになりました。例えば、手洗いや歯みがきの際に必要な最小限の水を使うようにする、シャワーを出しっぱなしにしない、浴びる時間を短くするなどです。この少しの節水を、水を自由に使うことのできる世界中の人々が行えば、とてつもない力になると思います。限りある資源を守り続けていく責任が、私たちにはあるのだと気付きました。

入選

石けんでつなぐ水

福岡県 福津市立福間東中学校 三年 渡口 紗衣

私の家では石けんを使っている。食器を洗うのも石けん、体を洗うのも石けん、洗濯するのも石けん。しかし、家の水は井戸水が流れており、石けんが固まりやすく相性が悪い。それを不便に思った私は一度、「どうしてうちでは石けんを使っているの。」とたずねたことがあったが幼い自分には母の説明がよく理解できず、つい最近まで「何となく」で石けんを使ってきた。しかし、一つの新聞の記事によって、私の石けんに対する見方が大きく変わることになる。

私の住んでいる福津市の隣の宗像市にある地島で実験が行われた。何となく読んでいた新聞に記されたこの記事に、私はくぎづけになった。何シャボン玉石けん、宗像市、山口大学、九州環境管理協会の四者により無添加石けんが環境や生物にやさしいことを確かめるこの実験では、合成洗剤でなく無添加石けんを三ヶ月間、島民に使用してもらった。

「私の家と同じだ。」

しかし、今まで手間のかからない合成洗剤を使ってきた島民はどう感じたのだろうか。新聞には載っていないなかったその後の石けんの使用状況が気になり調べてみることにした。すると、驚くことに八割程の島民は継続して使用していることがわかった。ところが、そのことを母に話すと「今はあまり使用率は高くないそうよ。」

とのこと。実は母はこの実験についての講演を聴いていたのだ。なぜかを調べてみると、なるほど、値段が高い。その他にも石けんカスで服が白くなったり、使いづらかったりと欠点があるようだった。

実は実験の行われた地島は皇室献上わかめの採場で、石けんの使用によるわかめへの影響が明らかとなった。まず、十倍に希釈した合成洗剤と無添加石けん、添加なしの三つそれぞれにわかめの幼芽を二週間浸して生育状況を調べた。結果、合成洗剤につけたものは生長しなかったのに対し、石けんは何も添加しなかったものと同じくらい生長したという。

また、島民が三ヶ月間石けんを使った後の下水を調べると微生物がイキイキしている状態だったため、確実に三ヶ月前と比べて水の状態は良いと考えられる。結果として、石けんはわかめの生長にほとんど影響を与えず、さらに水を汚さないことが分かった。これを目のあたりにした島民の大半は漁業に関わっており、反応は大きなものだった。特に子どもたちの環境への関心が高まったことには驚いた。ただ、それゆえに値段などの問題で石けんから遠のいてしまうのは残念に思った。

石けんは水を汚さず環境にも良いその一方で値段や使いにくさなどの問題を抱えており、現時点では石けんを使う人は少ない。しかし、その中でも工夫できるのではないだろうか。例えば、よくコマーシャルであるような合成洗剤は石けんカスのようなものは服につかない。これは色々な技術を使って解消していったための成果だ。このような高度な技術をもつ大手企業が石けんを改良して販売すれば、石けんを使う人が増えるかもしれないと思った。私は今まで石けんを「何となく」で使ってきた。しかし、実験から石けんの良さを知ること、石けんを使っている良かった、そしてもっとたくさんの人に石けんを使ってもらいたいと思うようになった。中学生の自分にも石けんの良さを伝えたりとできることはあると思う。自分たちができることをし、少しでも石けんを使う人を増やしていきたい。そして、きれいなままで「水」を次の世代へとつないでいきたい。

入選

水は生き物だ

長崎県

長崎大学教育学部附属中学校 三年

小嶺 桃佳

水は、生き物にとって必要不可欠である、とよく言われる。しかし私は、「水は、生き物の命である前に、水自体も生き物のよう」だと思う。昨年、ドイツとオランダを研修で訪れる機会をいただいた。二か国が位置するヨーロッパには数多くの大きく長い川がある。

二か国ともに共通していたことは、生活の身近なところに、川や運河など、大量の水があるということ。私たちが最初に訪れたドイツの町には、川が流れていた。いくつかの町を経由してライン川に合流する、大きな川だ。そして川のすぐそばには建物が立ち並んでいた。さらに、その川では、水運業が発展していたのだとか。一方で、川は、古くから洪水を繰り返しているのだそう。実際、私たちが訪れた時も大雨が降った直後で、水のかさが増し、滔々たる濁流であった。川のほとりにあるベンチも水につかっており、私は衝撃を受けた。こんなに大きな川が本当に洪水を起したらどうすればいいのだろう。氾濫したらどんなに大きな被害が出るだろうか。水は、普段人を助けていても、何かの途端に人間に牙をむく生き物なのだ。私の住む長崎でも、四十年程前に長崎大水害が起ったが、私にとっては画面の中の、歴史の中の出来事にすぎず、自分事として捉えられていなかった。水に危険な側面があることは頭では分かっていたのに、いざその威力を目にしてみると、眼前に広がる光景を信じられなかった。

オランダでもまた、「水の生き物としての側面」をたくさん考えさせられた。オランダには干拓地が多く、運河がたくさんある。工芸品として有名な木靴は、低湿地帯の多いオランダでの農業で用いられていたそうだ。世界遺産にも認定されているオランダの風車は昔からの治水システムで、住民皆で協力しながら洪水を防いでいたという。私はそんなオランダで、運河クルーズに乗った。水の上から望む街並みは歩いていた時とはまた違った味わいがあった。歴史も説明していただき、この運河は

ずいぶん昔から、何百年も前から、オランダを見守り続けてきたんだなと感じた。オランダの人々にとっては運河があることが当たり前で、水とずっと、共生してきたのである。人を支え、時には牙をむく。水の長所と短所の両面を、改めて突きつけられた。

さらに、生き物には個性があるように、水はそれぞれの地域で違う個性をもつ。出発前の説明会で、ヨーロッパの硬水と日本の軟水の違いについて知ったが、生まれてこの方、水道水が直接飲めるという生活が当たり前であった私には、深く理解ができなかった。しかし、実際に現地の水を使ってみてようやく、納得がいった。でもこの違いは、軟水だから良い、硬水だから良い、ということではなく、ヨーロッパと日本の地理的な違いが生み出した水の個性なのだ。この個性は水質に留まらず、地域ごとに採れる水の量、生息する生き物など、様々な種類のことに当てはまるのではない。実際に、同じ長崎県でも地域によって水道料金に差がある。また、私の家の近くの川には亀や鳥、小さな魚たちが生息しているが、長崎県の中には水路で鯉が泳いでいる地域もある。水は、雨から始まり、その地域の地質や降水量、土壌の状況などの分岐やフィルターを通してオンリーワンとなる。私たちが普段何気なく使っている水は、自然の営みが絡まりあって生まれた、ユニークな生き物なのだ。

「生き物のような水」。私たちは水の恵みと厳しさにずいぶん昔から向き合ってきたのにも関わらず、この生き物を傷つけている。これ以上この生き物たちが傷つかないように、私たちの生活を支える唯一無二の一滴一滴に感謝し、大切に使うことから始めていきたい。

入選

未来を支える地産地消

熊本県 八代市立第八中学校 三年 稲田 侑子

「だいたいま。」

私には毎日の楽しみがある。それは、炊飯器の中を確認することだ。炊き立てのご飯はまるで宝石箱だ。見ているだけで幸せな気持ちになる。私の家のお米は、私の住む地域でとれたものだ。つまり、私は毎日、地産地消をしている。地産地消とは、地域でとれた農作物をその地域でできるだけ消費しよう。というものだ。そうすることで出荷・販売にかかるコストを抑えられたり、安心して新鮮な食材を購入できたりする。また、そうすることで、地域の恵みを守ることができる。「ウォーターオフセット」という言葉をきいたことはあるだろうか。ウォーターオフセットとは「地下水を育む水で栽培された農作物や、それを食べて育った畜産物を購入・消費することで、地下水保全につながる取り組み」のことだ。熊本の水はほとんどが地下水だ。つまり、ウォーターオフセットの農作物を購入・消費することで、地域の恵み、熊本の地下水を守ることができる。

私が毎日幸せに浸りながら食べているお米は、ウォーターオフセットでつくられたものだ。以前、私はお米農家さんの家へあそびに行つたことがある。八月だったため、山に囲まれていたが、とても蒸し暑かった。そこで、近くの川で遊ぶことになった。川の中には、おたまじやくしやサワガニなど、たくさんのお生物が住んでいた。川の水は透き通っていて川底の石がキラキラとひかっていた。その隣には、鮮やかな緑の葉の間から、少し離れた稲穂が顔をだしていた。私が川で遊んでいるとき、農家のおじちゃんがずっと田んぼを眺めていたから、私は不思議に思った。だからおじちゃんに眺めている理由をきいた。

「きれいな水がないときれいなお米はできないんだよ。」

と言われ、私は「そうなんだ。」とあまり深くは考えなかった。

しかし、突然私が大好きなお米を食べられなくなった。それは、「令和

二年七月豪雨」だ。いつもお米をつくってくださる農家さんの田んぼも被害をうけてしまったのだ。私が遊んでいた川は氾濫し、川底できらきらとひかっていた石は、田んぼの中に入り、水は汚れてしまった。その時に初めて、私は農家のおじちゃんが言っていたことが分かった気がした。「きれいな水がないときれいなお米はできない。」今回の災害できれいな水ではなくなり、お米がつくれなくなってしまったのだ。

現在は復旧され、私の家ではまた宝石箱のようなご飯が炊けている。

この出来事をきっかけに、私の「水」への見方が変わった。毎日日本中、世界中でつかわれている水はあたりまえではないということだ。私に住んでいる熊本県は、「水の国」と呼ばれている。それは、豊富な地下水に恵まれているからだ。しかし、今、この地下水が減少しつつある。その理由は、都市化により水田の作付面積の減少を受け、地下水が減少していることだ。そこで、今注目されているのが、ウォーターオフセットだ。ウォーターオフセットの商品を購入・消費することで、地下水保全につながるのだ。水は災害をもたらしてしまうことがある。一方で、水は米などの幸をもたらしてくれることもある。だから、今を生きる私たちには水を守っていく義務がある。水を守るとだけ言われると難しそうに感じるが、私たちは毎日必ず水を使っているはずだ。だから、手を洗う時に使わないのなら水をとめたり、川にゴミを捨てて川を汚さないようにしたり、私たちにできることはたくさんある。また、その中でできることがウォーターオフセットである。地域の食材を買う、地産地消をすることも地域の水を使うため、水を守ることにつながる。水を守るために自分にできることをして、今ある有限の水を未来へつなげて、支えていきたい。

入選

じまんの水

熊本県 八代市立第八中学校 一年 田代 優羽

「日本一きれいな水、熊本県」そんな名前で投稿された動画を見た。そして、熊本は水に恵まれたところなのだ、誇らしく感じた。そこで、水に興味を持ち、自分が住んでいる宮地町について考えてみた。すると、たくさんきれいな川や水路があることに改めて気づかされた。

私が登校している学校では、小学校の五、六年生と中学校一年生の三学年で、自分の住んでいる地域について勉強する「みやじ学」というものがある。その、みやじ学で、私は伝統である和紙について、十二人くらいのメンバーで調べた。その歴史は、江戸時代の初期に福岡から伝わり、現在までずっと続いている伝統工芸だと知った。和紙をすくにはきれいな水がたくさん必要である。そこで、きれいな水が流れる川や水路をたどった。たどっていくと、だんだん自然豊かな山に近づいた。そして、その水路は普段何気なく通っている登下校の道まで続いていた。その景色から、私は地域の方々はずっと昔から伝統である和紙作りを守るために、水路に流れる水をよごさないように大切にしてくれたことに気づき、とてもありがたく思った。

私が卒業した小学校では、卒業証書を自分で作るという行事がある。その卒業証書は、和紙だ。現在和紙をすく職人は一人だけしかないこと知り、とてもおどろいた。だから、そのような中で和紙をすく体験をさせてもらえたのは、とてもありがたいことで、忘れることのできない、良い思い出となった。和紙を作ってみて、水路からひいた水は冷たく、和紙をすいている間にとっても寒くなり、和紙作りが大変であることがよく分かった。

もし、水路を流れる水がにごっていたら伝統である和紙をすくことができなくなる。また、宮地に住むたくさんの方の生き物も生きていけなくなってしまう。しかし、宮地の水は何十年も前からすき通っていて、とてもきれいだ。それは、今まで宮地の川、水路を大切に守り続けてくれた

地域の方々のおかげだ。油や食器に残った調味料をふき取るのは手間だっただろう。それでも、宮地のきれいな川や水路、そして伝統である和紙を次の世代へとつなげるために頑張ってくれた地域の方には感謝の気持ちでいっぱいだ。他にも、宮地が自然豊かで雨がたくさん降る気候のおかげで、木々の栄養と共に水が川へ流れていき、きれいな水が成り立っている。

また、私の地元の宮地町の妙見神社では、毎年六月一日に「氷室祭」というお祭りがおこなわれている。水に見立てたお菓子を食べて、一年間の健康や家内安全を祈るお祭りだ。このお祭りの起源は、三五〇年以上前にさかのぼると言われている。江戸時代、八代城主として来た細川三斎という殿様が、妙見神社に参拝した時に、無病息災を祈って、東町の三室山にもった雪を神様に献上したのが始まりだと言い伝えられている。雪も氷も水のひとつであるので、私の地元は水と昔から関わっていたことを知り、とてもうれしかった。

私は、自分の地域の水について学んで、これからも豊かできれいな水を守るために、私にできることはどんなことを考えてみた。例えば、油や調味料を水に流さず、ティッシュでふき取って、水を汚さないようにしたり、歯みがきやお風呂に入ったるときには、節水を心がけて、水を大切にすることができると。このようなことに、みんなが取り組んでいけば、きれいで豊かな水が保っていただけるだろう。そして、今度は私たちが次の世代へつなげていきたい。

入選

命を育む水

私の祖父は農家だ。私の住む所は自然が多く、近所にも農業をしている人がたくさんいる。私は祖父父母の家の近くに住んでいて、毎年田植え、稲刈りの手伝いをする。

米作りで絶対に欠かせないものは「水」だ。田んぼには必ず用水路があり、田植えの時期には水が流れる。その後も水の量を調節しながら、稲を育てていく。

私は小学校四年生の時、昭和井路に関する施設を巡り、農業用水についての話を聞くという見学会に参加した。農業用水とは、ため池、川から取水され、農業に関する全てに使われる水のことだ。昭和井路というのは、大分県の農業用水を運ぶ水路の名称である。昭和井路は人が農業をするための水を運ぶものだが、それが、水を無駄にしないような仕組みや生き物が生きていくための場所にもなっていることはあまり知られていない。私は、見学会で初めて昭和井路や水利施設のことを知った。

私の住む地域の近くにも、昭和井路や水管橋があり、その施設が私の祖父の田んぼに水を運んでいるのだが、農業用水が運ばれているのは祖父の田んぼだけではない。大分県の農業が行われているすべての地域へと水を届けなくてはいけない。そんな施設には、安全に早く水を届ける工夫がたくさんあり、更には、農業用水以外にも利用されている。

まず、用水路の水を取水する百枝ダムだ。ここでは、農業用水と発電に使う発電用水を同時に取水している。水が止まると発電量が減るため水は止められない。そのため取り入れ水門で、流す水の量を調整している。百枝ダムから水路を流れてきた水は、大野川発電所の上部にある貯水槽で農業用と発電用に分けられる。発電所で利用された水は、大野川へ戻る仕組みになっている。農業用は、各地域の分水へと流れていく。その途中にも工夫がみられる。水路の途中に川や道路がある場合は橋がかけられている。山がある場合は水路が短くて済むよう、トンネルが掘

大分県 大分市立竹中中学校 一年 後藤 優奈

られている。広い谷を超える場合はサイフォンを利用して水を運ぶ。また、災害や大雨に備えて水を川に流す、放水門が所々に設置されている。最後の水利施設は、分水である。大分にはいくつかの分水がある。分水とは、農業用水を、様々な地域へ運ぶための分かれ道である。利光分水では、各方面に向けてトンネルがあるが、その前に水門が二つ付いている。その水門を一つ開けたり、二つ開けたりすることで、流す水を調整するので、見学会でその一つのトンネルを歩かせてもらった。もちろん、その時は水は通っていないが、円形でとても大きく、直径は3m前後。この水路が分かれ、また分かれ、さらに分かれて、どんどん分かれながら細くなっていき、農家の田んぼへ流れ、米作りに役立てられている。

用水路では、カエルやヤゴなどの生き物も生活している。また、山や林の近くを通る昭和井路の用水路では毎年冬になると、多くのオオイタサンショウウオが産卵する。昭和井路では、二月に水路の点検をして、卵の確認を行い、水路に水を流す準備が始まる五月に、流されてくる子供の保護をしている。保護をしない場合は、放水門から排水路に流され、オオイタサンショウウオが生きのまま通るのが難しい大野川までを安全に運ばれていく。生物が生きていくことにも役立っているのだ。更に、田んぼで利用された水の八十パーセントは地下水や排水路を流れ川へ戻っていく。

このように様々な工夫でたくさんの方々の田んぼに水を届けている用水路。これは人々が生きるために必要な作物を育てることや生物が生活していくことに役立っている。普段は気が付かなかったが、祖父の米作りに欠かせない農業用水を運ぶ用水路は自然保護や、環境保護、私たちの生活にも関わっている。様々な工夫で生物の命を守り、農家を支える、私たちの生活に欠かせない縁の下の力持ちなのだ。

入選

祖父が作った焼酎

宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 二年 外山 杏実

私の家の庭には、子どもが入るくらい大きな壺が三十個以上並んでいます。小学生の頃、庭で遊んでいた時に不思議に思った私は、同じ敷地内に住む祖父に尋ねたことがあります。すると、祖父がこう教えてくれました。

「水が出なくなつたからだよ。じいじは若い頃、焼酎作りをしていたんだよ。人気があつて、毎年できるのを楽しみにしているお客さんもたくさんいてね。でも、できなくなつてやめてしまつたんだ。」

祖父は、約五十年前、焼酎の酒造会社を経営していました。私が住んでいる場所に、工場や販売所があり、従業員やお客さんなど、たくさんの人で賑わっていたそうです。工場からの煙や発酵するにおいなども想像することができました。

祖父の話では、焼酎作りには美味しくて大量の水が必要であるということでした。近くに川が流れ、宮崎平野が広がる土地だったので、地下から水の確保ができ、順調に生産を伸ばすことができていたそうです。しかし、次第に水が出なくなり、続けられなくなつてしまいました。私が小さい頃、工場や販売所はなくなつてしまいましたが、醸造に使っていたたくさんのお酒は、庭に並べられて残っていたのです。祖父は、懐かしそうに話してくれました。

その頃に使っていた井戸水の蛇口が、庭に一か所だけ残っています。小学生の頃、夏になると、大きなビニールプールを出して、姉や友達とよく遊んでいました。水道の蛇口にホースを繋いで、大量の水をため、水遊びをするのが夏の楽しみでした。井戸水で冷たくて気持ちよかつたのをよく覚えています。

また、庭木の水やりにも利用します。木々が大きく成長し、木陰を利用して遊ぶことができます。野生の鳥達も、飛んできて、羽を休めています。水のお陰で、自然に囲まれ、落ち着いて生活することができてい

るのを実感します。

最近、台風や地震などの自然災害が多発しているように感じます。被害が大きくなると、水の確保が話題になります。そんな時、庭の井戸水があるので安心です。トイレや洗面など、とりあえずの生活水が常に確保できているからです。祖父が残してくれた一つの井戸水の蛇口が、家族みんなの暮らしを豊かにし、守ってくれていることに感謝しています。日本では、上下水道の整備が進み、蛇口からすぐに水を利用することができます。降水量も多く、水で困ることはほとんどありません。でも、世界では、水道の水が飲み水として利用できなかったり、上下水道の設備が整っていない国がたくさんあります。

「みずをくむプリンセス」という本には、水道がない西アフリカに住む母と娘が、何キロも離れた川に毎日水汲みに出かける生活が描かれています。そこでは、井戸を作るプロジェクトが進んでいるそうです。また、SDGs6「安全な水とトイレを世界中に」の意識を広げていくことも大切です。

しかし、地球温暖化や環境汚染も深刻な問題になっていて、今まで使えていた水源が減つてしまう現象も増えています。国連の予測によれば、二〇五〇年までに四人に一人が慢性的な水不足の影響を受ける可能性があるそうです。

そうならないために、水に恵まれた私達がそうでない国や地域にできることを考えていかなければなりません。まずは、日常生活で汚染水を流さないように意識し、出しっぱなしなどの無駄遣いをなくしていきたいです。

祖父が作った焼酎は、少しですが倉庫に残っています。大人になつたら、祖父の焼酎作りの話を聞きながら、飲んでみたいと思つています。

入選

世界中の人がきれいな水と出会うために

沖繩県 城東中学校 二年 下地 杏梨

「水、出さなければなしにしないよ。」

「大切に使う。」

これは私が今まで祖母に何度も言われてきた言葉です。水なんて当たり前にあるもの、蛇口をひねれば必ず水が出てくる。そう思っていた私は、今まで祖母に言われてきた言葉をあまり考えることなく生活していました。しかし、あることをきっかけにこの考え方が変化したのです。

それは、総合的な学習の時間で地下ダム資料館の見学をしたことです。なぜ地下ダムが必要だったのか、宮古島の水資源について、多くのことを学びました。私達の住んでいる宮古島は、降水量が多い島です。しかし、地層の性質の関係で、雨が降っても、四十パーセントは海に流れ、五十パーセントは蒸発するため、たったの十パーセントしか残らないので、常に水不足と隣り合わせの生活をしていたそうです。農業を行う上で、この状況はとても大変で、干ばつに悩まされることも少なくはなかったのです。そこで、水不足を解消するためにできたのが地下ダムです。この地下ダムによって沢山の地下水をため、必要なときに必要な分だけ水を送れるようになり、島の農業や産業が発展しました。また農業用水だけでなく、私達の飲み水も地下からくみ上げた地下水です。今、私達が水に困る事なく、昔よりも水に恵まれた生活ができているのは、たくさんの人々の技術と想いがあったからです。安心した暮らしができるのも、水のおかげだと言っても過言ではないと思います。

今でも世界には二十二億人、つまり十人に三人が安全に管理された水を使用できずにいるそうです。私は、SDGSについて調べた時に目にしたユニセフのCMを今でも鮮明に覚えています。茶色く濁った水を小さな手ですくって飲んでいる子どもの切ない表情、水不足が原因でポロポロに乾燥した地面を歩く少年。水くみで、学校にいく時間を奪われる

少年。本当に胸が締め付けられるような内容でした。

このように水不足で困っている人を一人でも少なくするために私達にできることはどんな事でしょうか。世界の水不足の原因の一つは、水の使用量の増加だと言われています。これは、人口増加も要因の一つだとは思いますが、一番は「水は当たり前前にあるものだ」と思い、贅沢に使用している人が多い事だと思います。最近の宮古島でも観光客増加によって水不足が進行しているようです。水に困ったことがない暮らしの中で、水不足なんて関係ないと思っていまいませんか。しかし地下水にも限界があるため、水不足になる可能性も少なくはありません。資源には限りがあるのです。だからこそ私達は世界中の人々や地域の為にも、節水に取り組んでいく必要があるとおもいます。お風呂で必要がない時は水を止める、野菜や食器はため洗いをする。など一人ひとりのこの小さな行動の積み重ねが、やがて大きな力になっていき、これが水不足を減らし、一人でも多くの命を守ることに繋がっていくと思います。

私も、水について考え、学んできた今だからこそ、祖母に言われてきた言葉の重みを感じられます。生きるために大切な水。これは当たり前にあるものじゃない。だからこの貴重な水を守るために、自分自身の日々の生活を見直し、水不足を減少させるために中学生の私にもできることを考えて行動していこうと思います。世界中の人が、きれいな水と出会うために。

入選

水は「当たり前前」ではない

沖縄県 城東中学校 二年 小山 蒼介

誰しも「水が好きなときに好きなだけ飲めるのは当たり前」と思ったことがあるだろう。意識すらしたこともない人もいるかもしれない。僕も、例外ではなくそう思ったことがある。しかし、それは大きな間違いである。僕たちが不自由なく水を飲んだり、使ったりできるのは、先人たちの工夫と努力の結晶であることを、どれくらいの人を知っているだろうか。

僕の暮らしている宮古島は、特徴的な性質を持っている。それは、地中の琉球石灰岩層の性質だ。その性質によって、島の人々は昔から水を得ることに苦労していた。琉球石灰岩層は隙間が多い層で、雨がどれだけ降ろうが水分が地中深くに染み込んでしまい、雨水が溜まりにくい状態だった。干ばつが続くとどこからも水を運んでくることはできないため、島の農業は大きな打撃を受け、人々は苦しんだ。そこで工夫を施し誕生したのが、宮古島の地下ダムである。地中に壁を作って雨水を塞ぎ止める設備を設置し、地中に雨水が溜まりすぎることのないように、壁の上方を少し開けるといふ工夫を凝らしているそうだ。目に見えない島の大地の下で、水を得るための大きな努力があったことに驚いた。地下ダムにより、島の農業は以前よりも収穫量が増加し、多様な作物を生産できるようになったそうだ。宮古島の山もない、川もないという地形に負けず、試行錯誤を繰り返し、見事自分たちの水を手にいれた先人たちは英雄と言えるだろう。

僕は以前、山形県のある地域に住んでいた。そこには、鳥海山という山があり、湧き水が豊富にあった。宮古島ほど水を手に入れるのに苦労していないので、そこでの暮らしの中では、僕自身、水への意識があまり高くなかったように思う。宮古島の水は硬水なので、飲料水はスーパーでミネラルウォーターを買うことが多いが、山形では湧き水が豊富だ

ったので、ところどころに水くみ場があり、飲み水はそこでくんでいた。井戸を掘れば大抵の場所で湧き水が出ると聞いたこともある。だから水は「当たり前」に身近にあるものだと思っていた。

しかし、その水は鳥海山にしみ込んだ雨水や雪解け水が、再び湧き出るまでには、二十年の歳月を必要とするそうだ。この自然が与えてくれる恩恵を「当たり前」と、簡単に言っているものだろうか。蛇口をひねれば水が出る、地下ダムによって、地中に水を貯める、湧き水が豊富にある。この環境は、決して当たり前ではない。自然の豊かさ、先人たちの知恵や工夫が水を守り、僕たちの暮らしを守ってきた。僕たちは、今水に困らない「当たり前」の環境に感謝し、さらに水資源を守っていく努力をしていかなければならないと思う。同じ日本でも、それぞれの地域やそこにある地形の特質によって水への意識はガラリと変わり、手に入れる手段や工夫も大いに変化する。僕たちがこうやって日頃から水を当たり前のように飲めるのは、必ずその背景に先人たちの工夫と努力がある。

蛇口から出る水も、目に見えない大地の中で島を守る水も、さとうきび畑に散水されるスプリンクラーからの水も、その一滴一滴の水には、ここに来るまでに長い長い道のりと、たくさんの人々の歴史がある。そのことを心に留め、僕はこれからも「当たり前」ではない水を大切に、未来へ受け継いでいきたい。

入選

よく耳にするあの放送

沖縄県 伊是名中学校 三年 諸見 利音

「伊是名村役場から節水のお知らせです。」
最近このような放送をよく耳にする。最初聞いたときは「へえ、そうなんだ。」とあまり実感がなく軽く流していたが、新聞や何度も放送を聞く度にこれは他人事ではないと思った。

私の中で水は当たり前であり、無限だと思っていたが、様々な体験をしたことで水は無限ではないと分かった。

それを実感したのはプールの授業が無くなったことだ。一日のプールの使用量は約四十五万リットルだが伊是名村では島全体の供給量が間に合わず、生活用水を優先させるため大量に水を使うプールは真っ先に打ち切られたのだ。前年度まで当たり前に使っていたプールが出来ないことにとっても衝撃を受けたと同時に水ってなくなるものだと初めて焦った。

そして、水が無くなってしまったら、伊是名のさとうきびや米などの特産物に影響が及ぶのではないかと考えた。

二〇二三年の八月にあった台風で、沖縄県全域で断水が起こった。もちろん私が住んでいる伊是名村も例外ではなかった。そのためトイレに行く回数を減らすためあまり水を飲まないようにしたり、風呂に入らず汗拭きシートなどで拭いたりした。今まで安心・安全に暮らしていたのに、断水したことで、脱水症状や皮膚炎などにならないか心配もあった。

十日ほど経った頃、水道から水が出たとき水があることに感謝と安心感が出てきた。

そして今、追い打ちをかけるように、ダムの貯水率が下がった。その理由を役場に勤めている父に聞いてみた。

その理由は次の通りだった。前の水は、海水から真水に変えるため石灰が入っており、あまり生活用水としての基準がギリギリだった。その

ため、料理に使う水は購入する人が多かった。それを改善するために現在ではダムの水も取り入れ以前より安心して美味しく飲めるようになった。しかし、晴天が続く供給が間に合わない可能性があるということが分かった。

そこで、ふと放送と台風を思い出した。このままいけば台風の時と同じように断水しかねない、またあの辛かった経験をしなければいけないと不安に駆られた。

これまでの体験や話を聞いて、水は無限ではないし、水が使えるのは限度があるということを凄く感じた。そして、村民が飲めるように頑張っただけで作ってくれたものを無駄にできないと感謝を強く感じ、これからの水の使い方について改めて考えさせられた。

「伊是名村役場から節水のお知らせです。」

この放送を聞く度に台風の経験を思い出している。晴天が続くとまたこの放送は流れてくるだろう。再び台風のような経験をしないためにも、これからは、風呂に入る時間を減らしたり、こまめに水を止めたりと工夫をして節水を心掛けていきたい。

入選

水道と感情

オランダ アムステルダム 日本人学校 中学部 三年 塚本 伊織

私の出身は「日本」だ。安全な水は当たり前前。蛇口を捻れば水が出るのも当たり前前。外食時に、サーブिसで水を無料で飲むことができるのも当たり前前。母国である日本ではこれらが当たり前と化している。しかし、海外ではどうだろうか。

私の在蘭歴は今年で三年目となる。そんな私のこちらでの経験と、日本の当たり前前について、そして、水への価値観について示したいと思う。文章の冒頭に書いたように、主に三つをテーマとして私の体験談を書くこととする。

まず一つ目。イタリア旅行で危うく弟と妹を病院送りにするところだったという話。少々大げさに言ったが事実だ。原因は、山の麓で汲んだ飲み水である。そこは有名な観光地で、周囲の人も蛇口から汲み、飲んでいた。私も一口飲んで、水が欲しいと言っていた妹と弟にあげようとした。が、母に「この子らは、まだそういった水への免疫がないからあげるな。」と言われた。これは、海外での基本ルールだ。蛇口の水が飲めない国もある。海外全てではないが、蛇口の飲み水の基準（WHO）に達していない国も多々存在する。

二つ目は、フランスの宿でのシャワー事件。その日は真冬で、夜遅くまで外出していたため、体が冷え切っていたにもかかわらず、シャワーからお湯が出なくなってしまった。ちょうど母がシャワーを使っていたときだった。が、母は、お湯が出ないことに動じず、水風呂ならぬ、水シャワーを見事にやっつけた。これが、海外旅行に付き物というわけではない。しかし、こういうこともある。

最後に三つ目。お店のお冷やについて。オランダに来て特に気にしたことにはなかったが、日本に一時帰国して気づいたことが、お店のサーブिसで出るお冷やについてだ。海外では、基本的にサーブिसでお冷やは出ないことが多く、水は他のドリンクと同じ扱いなのだ。だから、外出時

は水筒を常備することが私の当たり前前となっている。

今、提示した体験談の他にも、自動販売機がほとんどないなど、日本の当たり前前のすごさを目の当たりにした。決して、海外は不便、海外は住みにくい、海外は最悪、と言っているわけではない。むしろ、当たり前前を当たり前前と思っている私の考えを変えてくれたこと、社会的な考え・知識・視点を与えてくれたことに感謝しているくらいだ。

さて、今まで書き記したことのまとめとして、自分の水への思いをいくつか書こうと思う。正直に言っ、安全な水の価値が日本と海外で違うことを飲食店で目の当たりにし、かなりの衝撃と同時に焦りを覚えた。自分が当たり前前と思っていたものが、実際すごいことだったと実感した。私は、水や食料を満足に得ることができない国があるということを知っていて、「いただきます」と言っ、食べて飲んでる。必要以上に贅沢なことをしていたことに恥ずかしさと申し訳なさでいっぱいだった。これは、私が個人的に考えたもので、社会的に不要であったり、話があつちやこつちやにとびかう、聞くだけ無駄な意見だったりするかもしれない。しかし、私はそのように考えたため、これ以上のこういった後悔がないように水に感謝し、さらなる向上を目指したいと思った。

かなり、スケールが大きく、実行の計画もなく、あまりに無鉄砲だが、「ぼくの前に道はない、僕の後ろに道は出来る」というように、沢山の選択肢から、世の為になる道を切り開けたらいいなと思う。

最後に一言だけ伝えたい。

拝啓 水様 いつもありがとう 敬具



第46回 全日本中学生

水の作文 コンクール

作品
募集

考えよう。
そして伝えよう。
大切な「みず」のこと。

「水」をテーマにした作文を募集します。
「水」とは、みなさんにとって、
どんな存在ですか？
暮らしの中での体験や、
授業などで学んだこと、調べたこと…
みなさんにとって、
大切な「水」への思いを
つづってみませんか？



ポケットモンスター
No.134 シャワーズ

タイプ みず とくせい ちよすい

シャワーズはきれいな水辺に生息し、細胞が水の分子に似ていることから、「水の日」応援大使として8月1日「水の日」を応援しています。

Photo:
中興寺湖(栃木県日光市)

◆ メインテーマ
水について考える
(個別の題名は自由)

◆ 応募対象
中学生(2024年4月時点)
海外からの応募もお待ちしております。
※作品は日本語でお書きください。

◆ 応募締切
【国内】各都道府県の水資源担当部局にお問い合わせください
【海外】令和6年5月17日(金)
◆ 提出先(問い合わせ先)
国土交通省水管理・国土保全局
水資源部水資源政策課
〒100-8918 東京都千代田区霞が関2丁目1番地3号
TEL:03-5253-8386(直通)

【主催】水循環政策本部、国土交通省、都道府県
【後援】文部科学省、農林水産省、経済産業省、環境省、
水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構、全日本中学校長会

8月1日は「水の日」 | 水循環基本法で、8月1日は「水の日」と定めています。8月1日から7日は「水の週間」です。

©2023 Pokémon. ©1995-2023 Nintendo/Creatures Inc./GAME FREAK Inc. ポケットモンスター・ポケモン・Pokémon は任天堂・クリーチャーズ・ゲームフリークの登録商標です。

水の作文 検索

※詳しくは、二次元バーコードから
「水の作文コンクール」ページを
ご覧ください。



第46回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

- 1 応募要領
- ① テーマ・・・「水について考える」（題名は自由）
 - ② 対象・・・中学生（令和6年度に中学校に在学中の者、または、これらの者と
同じ年齢の者を含む）
 - ③ 原稿枚数・・・400字詰原稿用紙4枚以内で日本語により表記された個人作品
 - ④ あて先・・・中学校等の所在する都道府県水資源担当部局、ただし、外国に居住する
者にあつては、国土交通省水管理・国土保全局水資源部
 - ⑤ 応募期間・・・令和6年5月31日までに国土交通省水管理・国土保全局水資源部あて
到着分有効
 - ⑥ 版權等・・・○応募作品は自作の未発表のものに限る
○応募作品の使用権は、主催者に帰属する
○応募作品の返却は行わない
- 2 審査
応募作品7,516編のうち、各都道府県の地方審査を経た202編について国土交通省水資源部による
内部審査を行い、中央審査会の対象となる40編を選出。
令和6年6月28日に開催された中央審査会において、最優秀賞1編、優秀賞9編及び入選30編
あわせて40編の入賞作文を決定。

3 表彰 (1) 賞および賞品

| 賞 | | 賞品 |
|--------|-----------------|-------|
| 最優秀賞 | 内閣総理大臣賞 | 賞状、副賞 |
| 優秀賞 | 農林水産大臣賞 | 賞状、副賞 |
| | 経済産業大臣賞 | |
| | 国土交通大臣賞 | |
| | 環境大臣賞 | |
| | 全日本中学校長会会長賞 | |
| | 水の週間実行委員会会長賞 | |
| | 独立行政法人水資源機構理事長賞 | |
| シヤワーズ賞 | | |
| | 中央審査会特別賞 | |
| 入選 | | 賞状、副賞 |

(2) 表彰式 最優秀賞及び優秀賞の受賞者を令和6年8月1日（木）に日経ホールにて開催された
「水を考えるつどい」において表彰

4 中央審査委員（敬称略）

- 瀧川 拓哉 内閣官房水循環政策本部事務局参事官：農林水産省農村振興局整備部水資源課長
- 向野 陽一郎 内閣官房水循環政策本部事務局参事官：経済産業省経済産業政策局地域経済産業グループ地域産業基盤整備課長
- 片貝 敏雄 内閣官房水循環政策本部事務局参事官：国土交通省大臣官房参事官（水管理・国土保全局担当）
- 筒井 誠二 内閣官房水循環政策本部事務局参事官：環境省水・大気環境局環境管理課長
- 熊谷 恵子 全日本中学校長会編集部長
- 須磨 佳津江 キャスター
- 長崎 宏子 スポーツコンサルタント 元オリンピックスイマー
- 渋谷 正夫 公益社団法人 日本水道協会調査部長
- 藤井 政人 独立行政法人水資源機構理事
- 橋本 淳司 水ジャーナリスト 武蔵野大学客員教授

- 5 主催者等 主催：水循環政策本部、国土交通省、都道府県
後援：文部科学省、農林水産省、経済産業省、環境省、
全日本中学校長会、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構

第46回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査優秀者名簿

| 番号 | 都道府県名 | 氏名 | 氏名 | 氏名 | 氏名 | 氏名 |
|----|-------|------------------|-------------------|-------------------|-----------------|--------------------|
| 1 | 北海道 | ○三浦 かりん | ◎はがわ 莉子 | | | |
| 2 | 青森県 | ちほり 麗陽菜 | ほりうち 結衣 | 中居 れいな | きむら 真緒 | こばやし 千花 |
| 3 | 岩手県 | いまむらこ はる 心晴 | うえつ まなか 植津 愛花 | さきき ゆりえ 江 | すがわら さくら | やまだ ゆい 結心 |
| 4 | 宮城県 | まつの みおな 松野 澗 | すがわら はる 波瑠 | はまな ゆきお 濱名 幸音 | | |
| 5 | 秋田県 | しげない まなか 茂内 愛佳 | さきはら なつみ 佐原 夏槻 | なりた うみ 成田 羽海 | | |
| 6 | 山形県 | | | | | |
| 7 | 福島県 | きたやま りほ 喜多山 莉帆 | つのだ さら 角田 紗羅 | はせがわ みお 長谷川 美桜 | まつもと ほるき 松本 晴樹 | やまぎ 陽向 山崎 陽向 |
| 8 | 茨城県 | こぼし ゆい 小橋 結友 | さかもと いちか 坂本 一華 | たごま ひな 戸崎 陽菜 | きたの あやな 北野 彩奈 | おおもり かのん 大森 花音 |
| 9 | 栃木県 | なかざと まひろ 中里 菜寛 | たなか うたえ 田中 詩恵 | たごま ひな 田所 楓子 | こだま ゆい 児玉 結彩 | つとむ 露久保 羽南 |
| 10 | 群馬県 | てらい りょうま 寺井 遼馬 | さかづめ かい 坂爪 開 | せきぐち えりか 関口 英理華 | たかほし なるひと 高橋 功人 | えはら 楓 江原 楓 |
| 11 | 埼玉県 | いのうえ そうた 井上 想太 | はやし のり 林能 みくり | ひらの にこ 平野 仁湖 | | |
| 12 | 千葉県 | もりぎね ありき 森貫 亜利彩 | はせがわ さき 長谷川 沙絵 | あべはら しおん 海老原 汐音 | いわせ ことほ 岩瀬 琴羽 | かとう このみ 加藤 香美 |
| 13 | 東京都 | ☆あきのが きつか 秋永 橘香 | おだの あな 小坂 陽菜 | ただの あ 多田 希亜 | さだの あな ラフィキ | |
| 14 | 神奈川県 | みずの 水野 カンナ | ◎かとう 孝祐 | たなか しんじ 田中 紳慈 | いしお 紗良 石尾 紗良 | みどりかわ ふろこ 翠川 楓子 |
| 15 | 新潟県 | ◎たまだ かのん 玉田 佳暖 | ◎まえた ななみ 前田 七海 | いとう ひまり 伊藤 陽莉 | ◎えばた あいり 江端 愛莉 | ほし まうる 星 万潤 |
| 16 | 富山県 | かわはら はやと 川幅 颯人 | ながい はるか 長井 悠花 | つじ にこな 辻 笑花 | | |
| 17 | 石川県 | ◎にし りょうせい 西 凌成 | | | | |
| 18 | 福井県 | みつい さやの 三井 さやの | たにくち たいが 谷口 大雅 | しもまき あずさ 下牧 あずさ | やまぐち あまね 山口 天音 | まえがわ ほたか 前川 穂高 |
| 19 | 山梨県 | | | | | |
| 20 | 長野県 | | | | | |
| 21 | 岐阜県 | まつばら もか 松原 萌夏 | いしい ちひろ 石井 千尋 | まえじま みらい 前島 美来 | さくらい おうる 櫻井 鳳琉 | おおむぎ ひより 大杉 ひより |
| 22 | 静岡県 | ◎こいけ しょうこ 小池 翔子 | ◎なぐら かず紗 | ◎みたわら はるひ 二村 陽日 | ◎おおたけ いろは 大滝 彩葉 | ◎にしが や あかり 西ヶ谷 あかり |
| 23 | 愛知県 | たけうち れんじゆ 竹内 蓮樹 | まつもと あきえ 松本 明笑 | | | |
| 24 | 三重県 | にしかわ ゆい 西川 優亜 | ◎わたなべ こはる 渡辺 心晴 | えきき れおな 江崎 礼智那 | おおにし いこい 大西 憩 | とみた 彩つき 富田 彩月 |
| 25 | 滋賀県 | おりはら あすか 折原 明日香 | やまぐち たいち 山口 大知 | ふたかみ こうき 二上 煌己 | | |
| 26 | 京都府 | ◎たくだ あい 徳田 葵 | さほ りい 佐保 里衣奈 | ◎えべ のん 江部 花音 | すずき あいら 鈴木 愛来 | |
| 27 | 大阪府 | ◎おかの あかり 岡野 朱里 | ◎おかの よういち 岡野 陽一 | ◎すまぶら ここ 須摩淵 心 | たかぎ まゆ 高木 真優 | ◎うつみ はなえ 内海 はなえ |
| 28 | 兵庫県 | とだ ゆきお 戸田 侑希音 | ◎かたおか ほろ 片岡 咲ほ | いしの あんな 石野 杏奈 | たかい りつほ 高井 律歩 | よやま こうめ 横山 小梅 |
| 29 | 奈良県 | おかだ みなせ 岡田 水瀬 | ともこ 山口 智子 | なかた あん 中田 絢心 | ますだ あん 増田 晏奈 | さかき 結虹 杉本 結虹 |
| 30 | 和歌山県 | たぐち れい 田口 怜愛 | ◎たなか しんのすけ 田中 伸乃丞 | みなむら あずみ 南村 安紀 | | |
| 31 | 鳥取県 | ◎たかはし 彩夏 高橋 彩夏 | かわかみ なな 川上 奈々 | はしもと ほるき 橋本 暖生 | | |
| 32 | 島根県 | みずなるみ 水 成美 | | | | |
| 33 | 岡山県 | むらき りわ 村木 里羽 | おがわ まお 小川 真央 | おおこうち さやか 大河内 彩加 | なかじま さやか 中島 彩花 | はしもと みつく 橋本 光来 |
| 34 | 広島県 | おかだ そら 岡田 そら | はっとり 翠 服部 翠 | やまね ゆうり 山根 悠羽璃 | | |
| 35 | 山口県 | さだもり りゆうこ 真森 琉悟 | もり川 なな 守川 奈那 | みかみ のん 三上 華音 | | |
| 36 | 徳島県 | ◎かわはら もも香 川原 もも香 | しまだ ゆい 島田 唯花 | みたらい はな 御手洗 花 | ◎やなぎもと きな 柳本 紗那 | まえた じゅんた 前田 淳太 |
| 37 | 香川県 | ◎にしお かのん 西尾 菜奈 | つしま じえい 都島 慈英 | まつい 莞汰 松井 莞汰 | ◎やました のん 山下 花音 | |
| 38 | 愛媛県 | かたかみ さら 片上 沙羅 | いのうえ つき 井上 月乃 | やまもと こうたろう 山本 皇太郎 | きたち りい 北地 梨衣紗 | ひの ゆりあ 日野 結里愛 |
| 39 | 高知県 | アナンド・アディテヤ | | | | |
| 40 | 福岡県 | ◎わたりの さえ 渡辺 紗衣 | そえだ はんな 添田 帆南 | たなか ゆう 田中 優羽 | ますだ 喜陽乃 増田 喜陽乃 | おおた はると 太田 晴大 |
| 41 | 佐賀県 | おかもと なおひろ 岡本 直大 | やまさき せい 山崎 聖華 | まつお れいな 松尾 怜奈 | たかはし みさき 高橋 美咲 | たしろ こうい 田代 祐唯 |
| 42 | 長崎県 | ◎こみね もも佳 小嶺 桃佳 | いかわき かな 岩崎 奏衣 | いしおか れな 吉岡 玲奈 | まつもと 莉愛 松元 莉愛 | なかむら ちさ 中村 千紗 |
| 43 | 熊本県 | おだ ひなこ 尾田 雛子 | ◎いのだ ゆうこ 稲田 侑子 | ◎たしろ ゆう 田代 優羽 | まつもと 佳子 松本 佳子 | はしもと かな 橋本 菜奈 |
| 44 | 大分県 | ◎ごとう ゆうな 後藤 優奈 | あな なこ 安邊 菜々子 | | | |
| 45 | 宮崎県 | ◎さきた りお 崎田 莉央 | いかわつ ももこ 岩坪 桃子 | たなべ あやの 田邊 彩乃 | ◎はやし はる 林 はる | とやま あんみ 外山 杏実 |
| 46 | 鹿児島県 | はらぐち きより 原口 純依 | くぼ ゆうな 久保 優奈 | たなべ 優希奈 辺木 優希奈 | よしだ 希音 芳田 希音 | とくやま 翔太 徳山 翔太 |
| 47 | 沖縄県 | ◎しもじ あんり 下地 杏梨 | ◎もろみ りお 諸見 利音 | ◎こやま そうすけ 小山 蒼介 | おおの こまち 大野 こまち | しいはま 虹春 後浜 虹春 |
| 48 | 海外 | ◎なかつ なぎさ 中田 凧咲 | ◎つかもと いおり 塚本 伊織 | | | |

(注) 氏名の前の印は、中央審査会における入賞者で、☆は最優秀賞、◎は優秀賞、○は入選

第46回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況

| 都道府県名 | 地方審査 優秀者数 (編) | 応募学校数 | 応募総数 (編) | | | |
|-------|---------------------|-------|----------|-------|-------|-------|
| | | | 1年 | 2年 | 3年 | |
| 北海道 | 2 | 6 | 141 | 68 | 67 | 6 |
| 青森県 | 5 | 3 | 32 | 0 | 7 | 25 |
| 岩手県 | 5 | 7 | 56 | 28 | 13 | 15 |
| 宮城県 | 3 | 3 | 7 | 0 | 4 | 3 |
| 秋田県 | 3 | 1 | 5 | 0 | 5 | 0 |
| 山形県 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 福島県 | 5 | 10 | 461 | 0 | 237 | 224 |
| 茨城県 | 5 | 7 | 368 | 93 | 203 | 72 |
| 栃木県 | 5 | 8 | 134 | 0 | 83 | 51 |
| 群馬県 | 5 | 4 | 319 | 0 | 120 | 199 |
| 埼玉県 | 3 | 2 | 80 | 0 | 79 | 1 |
| 千葉県 | 5 | 3 | 120 | 44 | 34 | 42 |
| 東京都 | 4 | 12 | 110 | 1 | 101 | 8 |
| 神奈川県 | 5 | 9 | 125 | 74 | 45 | 6 |
| 新潟県 | 5 | 5 | 11 | 1 | 8 | 2 |
| 富山県 | 3 | 3 | 97 | 0 | 67 | 30 |
| 石川県 | 1 | 1 | 2 | 0 | 0 | 2 |
| 福井県 | 5 | 1 | 61 | 0 | 29 | 32 |
| 山梨県 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 長野県 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 岐阜県 | 5 | 4 | 76 | 2 | 0 | 74 |
| 静岡県 | 5 | 5 | 27 | 5 | 10 | 12 |
| 愛知県 | 2 | 2 | 2 | 0 | 0 | 2 |
| 三重県 | 5 | 3 | 402 | 216 | 168 | 18 |
| 滋賀県 | 3 | 4 | 204 | 99 | 103 | 2 |
| 京都府 | 4 | 5 | 271 | 74 | 122 | 75 |
| 大阪府 | 5 | 8 | 657 | 347 | 238 | 71 |
| 兵庫県 | 5 | 4 | 364 | 11 | 235 | 118 |
| 奈良県 | 5 | 2 | 44 | 0 | 17 | 27 |
| 和歌山県 | 3 | 13 | 759 | 264 | 382 | 113 |
| 鳥取県 | 3 | 1 | 3 | 0 | 3 | 0 |
| 島根県 | 1 | 1 | 1 | 0 | 1 | 0 |
| 岡山県 | 5 | 9 | 14 | 6 | 1 | 7 |
| 広島県 | 3 | 5 | 43 | 1 | 40 | 2 |
| 山口県 | 3 | 1 | 10 | 0 | 0 | 10 |
| 徳島県 | 5 | 3 | 265 | 132 | 115 | 18 |
| 香川県 | 4 | 7 | 14 | 0 | 7 | 7 |
| 愛媛県 | 5 | 6 | 7 | 1 | 2 | 4 |
| 高知県 | 1 | 2 | 6 | 2 | 2 | 2 |
| 福岡県 | 5 | 8 | 628 | 0 | 238 | 390 |
| 佐賀県 | 5 | 6 | 165 | 0 | 101 | 64 |
| 長崎県 | 5 | 3 | 92 | 56 | 24 | 12 |
| 熊本県 | 5 | 9 | 809 | 242 | 385 | 182 |
| 大分県 | 2 | 3 | 5 | 1 | 1 | 3 |
| 宮崎県 | 5 | 8 | 379 | 131 | 133 | 115 |
| 鹿児島県 | 5 | 9 | 75 | 36 | 21 | 18 |
| 沖縄県 | 5 | 7 | 41 | 0 | 17 | 24 |
| 海外 | 24 | 5 | 24 | 1 | 11 | 12 |
| 合計 | 202 | 228 | 7,516 | 1,936 | 3,479 | 2,100 |

「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移

| | | 応募 学校数 (校) | 応募 総数 (編) | 性別 | | 学年別 | | |
|------|--------|------------------|-----------------|-------|-------|---------|---------|---------|
| | | | | 男 | 女 | 1年 | 2年 | 3年 |
| | | | | (編) | (編) | (編) | (編) | (編) |
| 第1回 | 昭和54年 | 634 | 4,875 | 1,878 | 2,997 | 1,513 | 1,710 | 1,652 |
| 第2回 | 昭和55年 | 486 | 3,930 | 1,446 | 2,484 | 1,245 | 1,462 | 1,223 |
| 第3回 | 昭和56年 | 487 | 5,569 | 2,159 | 3,410 | 2,004 | 1,974 | 1,591 |
| 第4回 | 昭和57年 | 512 | 5,111 | 1,878 | 3,233 | 1,923 | 1,848 | 1,340 |
| 第5回 | 昭和58年 | 495 | 4,192 | 1,435 | 2,757 | 1,925 | 1,214 | 1,053 |
| 第6回 | 昭和59年 | 531 | 7,013 | 2,905 | 4,108 | 2,923 | 2,115 | 1,975 |
| 第7回 | 昭和60年 | 572 | 9,703 | 3,676 | 6,027 | 3,794 | 3,647 | 2,262 |
| 第8回 | 昭和61年 | 507 | 7,431 | 3,080 | 4,351 | 2,809 | 2,680 | 1,942 |
| 第9回 | 昭和62年 | 513 | 9,253 | 3,789 | 5,464 | 4,086 | 2,935 | 2,232 |
| 第10回 | 昭和63年 | 498 | 10,119 | 4,233 | 5,886 | 4,212 | 3,501 | 2,406 |
| 第11回 | 平成元年度 | 641 | 13,192 | 5,601 | 7,591 | 5,345 | 4,392 | 3,455 |
| 第12回 | 平成2年度 | 551 | 11,782 | 5,320 | 6,462 | 5,404 | 3,549 | 2,829 |
| 第13回 | 平成3年度 | 623 | 12,056 | 4,834 | 7,222 | 5,174 | 3,821 | 3,061 |
| 第14回 | 平成4年度 | 552 | 12,718 | 5,332 | 7,386 | 4,898 | 4,533 | 3,287 |
| 第15回 | 平成5年度 | 473 | 13,680 | 5,340 | 8,340 | 4,658 | 5,024 | 3,998 |
| 第16回 | 平成6年度 | 557 | 13,647 | 5,591 | 8,056 | 5,247 | 4,577 | 3,823 |
| 第17回 | 平成7年度 | 558 | 15,918 | 6,617 | 9,301 | 5,940 | 5,388 | 4,590 |
| 第18回 | 平成8年度 | 491 | 15,479 | 6,595 | 8,884 | 5,403 | 5,606 | 4,470 |
| 第19回 | 平成9年度 | 456 | 13,688 | 5,731 | 7,957 | 5,088 | 4,792 | 3,808 |
| 第20回 | 平成10年度 | 493 | 13,764 | 5,935 | 7,829 | 4,842 | 4,609 | 4,313 |
| 第21回 | 平成11年度 | 429 | 11,903 | 4,971 | 6,932 | 4,324 | 4,059 | 3,520 |
| 第22回 | 平成12年度 | 413 | 14,283 | 6,288 | 7,995 | 4,737 | 4,968 | 4,578 |
| 第23回 | 平成13年度 | 362 | 11,841 | 5,131 | 6,710 | 3,862 | 3,844 | 4,135 |
| 第24回 | 平成14年度 | 413 | 13,442 | 6,159 | 7,283 | 4,878 | 4,691 | 3,873 |
| 第25回 | 平成15年度 | 453 | 13,385 | 5,980 | 7,405 | 4,100 | 4,618 | 4,667 |
| 第26回 | 平成16年度 | 452 | 16,488 | | | 5,595 | 5,655 | 5,238 |
| 第27回 | 平成17年度 | 439 | 15,726 | | | 4,489 | 6,464 | 4,773 |
| 第28回 | 平成18年度 | 373 | 16,038 | | | 5,157 | 5,811 | 5,070 |
| 第29回 | 平成19年度 | 385 | 16,173 | | | 5,242 | 5,697 | 5,234 |
| 第30回 | 平成20年度 | 339 | 14,927 | | | 4,516 | 5,118 | 5,293 |
| 第31回 | 平成21年度 | 344 | 16,462 | | | 4,929 | 6,038 | 5,495 |
| 第32回 | 平成22年度 | 378 | 16,941 | | | 5,592 | 5,925 | 5,423 |
| 第33回 | 平成23年度 | 365 | 19,618 | | | 6,930 | 6,635 | 6,052 |
| 第34回 | 平成24年度 | 368 | 16,826 | | | 4,542 | 6,692 | 5,591 |
| 第35回 | 平成25年度 | 368 | 18,191 | | | 5,564 | 6,602 | 5,924 |
| 第36回 | 平成26年度 | 331 | 19,419 | | | 6,555 | 7,406 | 5,365 |
| 第37回 | 平成27年度 | 345 | 16,432 | | | 5,197 | 6,949 | 4,280 |
| 第38回 | 平成28年度 | 314 | 15,246 | | | 4,533 | 6,110 | 4,603 |
| 第39回 | 平成29年度 | 357 | 16,725 | | | 4,735 | 6,910 | 5,080 |
| 第40回 | 平成30年度 | 314 | 14,151 | | | 4,182 | 5,750 | 4,219 |
| 第41回 | 令和元年度 | 290 | 12,760 | | | 3,584 | 5,554 | 3,622 |
| 第42回 | 令和2年度 | 319 | 9,444 | | | 2,263 | 4,377 | 2,801 |
| 第43回 | 令和3年度 | 351 | 13,025 | | | 3,253 | 5,816 | 3,777 |
| 第44回 | 令和4年度 | 404 | 9,249 | | | 2,279 | 3,902 | 3,067 |
| 第45回 | 令和5年度 | 278 | 8,779 | | | 2,125 | 4,141 | 2,513 |
| 第46回 | 令和6年度 | 228 | 7,516 | | | 1,936 | 3,479 | 2,100 |
| 合計 | | 20,042 | 578,110 | | | 193,532 | 212,588 | 171,603 |

- (注) ・第10回から海外在住中学生の作文募集を始める。
 ・第26回から作文応募時の性別表記を不要としている。
 (教育現場における男女共同参画社会づくりに向けた取り組みに配慮)
 ・学年未記入者は、第35回101名、第36回93名、第37回6名、第42回3名、第43回179名、第44回1名、第46回1名で学年別集計から除いている。

第46回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式

全国からの応募作品7,516編の中から選ばれた最優秀賞1編と優秀賞9編の表彰式及び最優秀作品の朗読は、令和6年8月1日（木）に東京都千代田区の日経ホールにおいて開催された、「水の日」を記念する政府主催行事「水を考えるつどい」内で実施されました。



瑠子女王殿下、作文コンクール受賞者、各賞授与者、
「水の日」応援大使『シャワーズ』による記念撮影

©2024 Pokémon ©1995-2024 Nintendo/Creatures Inc./GAMEFREAK inc.

ポケットモンスター・ポケモン・Pokémonは任天堂・クリーチャーズ・ゲームフリークの登録商標です。



国土交通省

Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism

国土交通省水管理・国土保全局水資源部

〒100-8918 東京都千代田区霞が関2-1-3

電話 (03) 5253-8111 (代表)

ホームページ

<http://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/index.html>